

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

格闘大会、来る！

【作者名】

昆布さん

【あらすじ】

三年前、日本チーム優勝の表彰式に八神庵が乱入し、幕を閉じたKOFが今再び、イタリアンマフィアも巻き込んで開かれる。紅、橙、青紫、緑。四つの炎がぶつかり合い、新たな戦いが始まる！

それぞれ日本チームはESAKA?、怒チームはthe Trooper、餓狼伝説チームはterry、中国拳法チームはWILL、竜虎の拳チームは極限修行！山ごもり、K'チームはKDO079+、ボンゴレチームは覚悟の炎、火焰の一匹狼チームは嵐のサキソフォン2、チーム黒曜は骸が出てくるときちよいちよいかかる管楽器の奴、おやじチームNEOは強敵、ヴァリアーチームは10年後ヴァリアー、韓国チームはWILDPARTY、新世代チームはSpread the wings / 永遠の翼、アンチ斎祁チームはEach Promise、ミルフィオーレチームはミルフィオーレの目的、シモンチームは強襲、幕間でボンゴレマフィアの

テーマをテーマソングとして設定させて頂きました。

二次創作小説まとめ@ウィキにも載せていますので興味が湧いた方はそちらもどうぞ。

OPENING 招待状

OPENING 招待状

ボンゴレチームの場合

「ふああああ…」

情けない大あくびをしながら沢田綱吉は郵便受けを覗き込んだ。

イタリア最大規模を誇るマフィア、ボンゴレの十代目である彼は家族がマフィア関係の問題に巻き込まれることを嫌い、自分で郵便受けを見に行くことにしているのだ。

「ん？なんだこれ？」

見ると家族がとっている新聞や家庭教師が購読中の裏社会タイムズの他に見覚えのない封書があった。

「何だろう、リポーンに聞いてみよう。」

そう呟いて綱吉が家庭教師でありマフィア界最強の赤ん坊リポーンにその封書を見せる。

危険物がないことを確認されたその封書にはこうあった。

キング・オブ・ファイターズを開催します。

出場人数は1チーム4名、ただし1試合出場人数は3名、1人はストライカー

として待機して頂きます…と。

それから数ヶ月後…沢田綱吉、右腕の獄寺隼人、親友の山本武、友人であり、綱吉の恋人の兄、笹川了平が中学校の校庭で試合開始を待っていた。

中国拳法チームの場合

「お師匠さんもつれへんなあ…また何かあったときに動けるのは多い方がええのに…」

緑の拳法着の少年がつまらなそうに隣にいる少女に話しかけた。

「拳崇、お師匠様も私たちの」とを思ってくれてるのよ。」
と返す少女に

「イヤ、まあ、そうなんやけどな。けどなあアテナ、わいかて今回のKOFには悪の気が感じられるんや、黙ってられへんねん。招待状もあるし、あと二人見繕って出場すべきやとわいは思うで。」

うん…とアテナは返すが顔を曇らせて

「でもあと二人に心当たりがないのよね…」

「せやなあ、お師匠さんは言わずもがな、包と桃子も一緒におるさかいあの二人も除外せざるをええへん、どないしよか…」

むむむ…と二人が思案しているところへ長身のサングラスを掛けたドイツ人がやってきた。

「やあ、久しぶりだなアテナさん。」

「あ、えっ…と…アルバ・メイラさん…でしたよね。お久しぶりです。」

なんやなんやと拳崇が二人の会話にわって入る。

「アテナ、この人知り合いか？」

「ええ、前に出場した個人戦のKOFでお相手させて頂いたの。結局負けちゃったけど。」

「いやいや、あれは運良く私が貴方の懐に飛び込むことができたからですよ。あのままサイコボールアタックではなくあの…シャイニンググリスタルビット…でしたね、あれを使われていれば負けていたのは私の方でした、さて、本題に入りますが、さらわれた弟を捜すためにあなたたちのチームに

入れて頂けないでしょうか。」

えっ!?とアテナと拳崇が顔を見合わせ、次に満面の笑みでアルバに向き直り、

「はい、よろしくお願いします…」

「是非…よろしゅうたのんます…」

といった、アルバは再び思案するようになて、これで後一人…と言っ。

「あっ！後一人…」

声をそろえた二人にアルバは視線を向けると再び考え込むようにうつむき、

「後一人…誰か心当たりは…」

と、そこまで呟いたとき、拳宗の顔面に小さな影が激突した。

「フガッ！なんやこの赤ん坊！」

おや、と影 紅い拳法着の赤ん坊 が足下（拳宗の顔面）に顔を向け、

「すみません、軒下なのでよく見えませんでした。」

「アテテテテ…ええけど気い付けてや！…ツてえ？アテナ、今の聞いたか？」

「うん、聞いた。今この子物凄く流暢に喋ってたよね…」

啞然とする二人を放って赤ん坊がアルバに話しかけた。

「久しぶりですね、アルバ・メイラ。」

「はい、お久しぶりです師匠。」

アルバの言葉に二人がびっくりしたように顔を見合わせた。

「今師匠っていわなかった？」

「ああ、ゆうてたゆうてた。」

「つてことは…」

「へ？嘘やろ…」

ああ、とアルバが二人に向き直り、

「紹介が遅れた、私の師匠の風だ。」

「よろしくお願ひします。」

「え…？」

「冗談や無かったんかい!!」

「ああ、そつだ師匠、ソワレを探すためにKOFに出ようと思うのですが人数が足りません、手伝って頂けますか？」

「仕方ありません、いいでしょう、それに今回の件、きっと彼らも参加するでしょうし、他の虹の赤ん坊にも会いたいですし。では、アテナさん…と言いましたね。」

「は、はい。」

「貴方をリーダーとして、拳宗君、アルバ、そして私でチームを組んで

KOFに参加しよう。」

よっしゃあ！と拳崇がガッツポーズを決めて

「これで4人！中国拳法チームの始動やあ！」
と叫んだ。

ヴァリアーチームの場合

「ボスさんよオ、あんま勝手しねえでもらいてえんだがなア。」

ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー本部、その隊長室にボスであるX
ANXUSと

作戦隊長であるS・スクアアロ、今はまだ一言も発していないが幹
部のベルフェゴールとマーモンはいた。

「俺がボスなんだから何をしようが俺の勝手じゃねえか。」

「だとオ!？」

目をむくスクアアロにベルフェゴールがしししと特徴的な笑い声
を上げて

「ムリムリ、ボスに隊長の意見が通ると思ってるの?」

続いてマーモンも

「無いね。」

と言い。

「しょうがねえなチクショウ！俺達ヴァリアーチームが優勝を搔つ攫
うとするかあ、!」

黒曜チームの場合

「あゝ退屈びょん！何かおもしろいものはねーびょんか?」

廃墟の一室に三人の少年がいた、内の一人、ワイルドな外見の城島
犬がいかにも退屈そうに言った。

「犬、うるさい。」

影のような印象のニット帽を被った少年がぼそりと反応し、
「ホントに退屈そうですなー犬ニーサン」

と、リンゴの被り物の少年、フランが皮肉る。

「おめーらは退屈じゃねーのかよ。」

「退屈だけど…何かやるのは…めんどい…」

「別にー、犬ニーサンと師匠のやりとり見てるだけでミーは十分面白いですよー」

へっ。と犬がふてくされたとき、隣の部屋から特徴的な髪型をした少年と言うには少し大人びている青年、六道骸が部屋に入ってくる。

「クフフフフ…まあそう言わずに、その退屈しのぎになりそうな物が始まりますよ。」

「退屈しのぎれすか？」

「ええ、キング・オブ・ファイターズを開催します…と。どうしますか？」

おやじチームNEOの場合

「しかし、思い上がりを防ぐ為とは言え、タクマ殿がよくご子息達とぶつかる気になられましたな。」

それで儂にもおやじチームとして参戦してくれとは…よくいった物ですな。」

江坂町の駅前の赤提灯でタクマと呼ばれた男と和服の男、そして軍服を着た隻眼の男が酒を飲み交わしていた。

「それはそうと、私はかまわぬが、ハイデルン殿は怒チームをどうなさるおつもりで？」

和服の男が続けるとハイデルンと呼ばれた軍人は

「心配は要らない。あれらも人数は足りているし私がいなければならぬと言っことはない。フィオリーナが少し頼りないがその分のこの3人がフォローすればいい話。それよりも柴舟殿、そちらこそ問題は無いのか？」

「ああ、一度京にもお灸を据えねば成らんとってな、まあ、少し前にパーフェクト負けしたが儂も鍛錬は積んでおった。何、問題ありませんぞ。」

ならいいが、とハイデルンが話題を変えるように言う。

「残りの一人はどうする。」

「そうですね、タクマ殿、我々では一人足りませぬぞ。」

そこへもう一人スーツの男がやってきてちよつとごめんよと席に着いた。

「タクマさん、この二人が俺達のチームメイトかい？」

そつ聞く男に柴舟が

「貴方がおやしチームの四人目か？」

と訊く、男はそれに

「いや、おやしチームの四人目じゃない、おやしチームNEOの四人目だ。」

「面白いことを言う、貴様、名前は何だ？」

「沢田家光だ、よろしくな、隻眼の傭兵ハイデルンさんよ。」

「ふん、ボンゴレの若獅子、とんでもない男が味方になった物だな、期待する。」

「ああ、期待してくれ。」

ある雑誌より

三年ぶりにKOF開催！今回の出場チームはこちら！

日本チーム 草薙京、二階堂紅丸、大門五郎、矢吹真吾！

餓狼伝説チーム テリー・ボガード、アンディ・ボガード、ジョー・

東、不知火舞！

中国拳法チーム 麻宮アテナ、椎拳崇、アルバ・メイラ、風！

怒チーム ラルフ・ジョーンズ、クラーク・ステイル、レオナ・ハ

イデルン、フィオリーナ・ジェルミ！

竜虎の拳チーム リョウ・サカザキ、ユリ・サカザキ、ロバート・

ガルシア、キング！

韓国チーム キム・カッファン、チャン・コーハン、チョイ・ボン

ゲ、ジョン・フーン！

K'チーム K'、マキシマ、クーラ・ダイヤモンド、ウィップ！

ボンゴレチーム 沢田綱吉、獄寺隼人、山本武、笹川了平！
火焰の一匹狼チーム 八神庵、雲雀恭弥、ネームレス、クリザリツ
ド！

チーム黒曜 六道骸、柿本千種、城島犬、フラン！
おやじチームNEO タクマ・サカザキ、草薙柴舟、ハイデルン、沢
田家光！

ヴァリアーチーム XANXUS、S・スクアード、ベルフェゴール、
マーモン！

新世代チーム ロック・ハワード、キム・ドンファン、キム・ジェ
イフン、北斗丸！

アンチ斎祁チーム エリザベート・ブランドルシュ、シエン・ウー、
デュオロン、アーデルハイド・バーンシュタイン！

ミルフィオーレチーム 白蘭、桔梗、ザクロ、灰崎紅蓮！

シモンチーム 古里炎真、鈴木アーデルハイト、加藤ジュリー、青
葉紅葉！

さあ、果たしてどのチームが優勝を果たすのか！

開催は一ヶ月後！今回も熱いバトルを期待しましょう！

.....

「何か今回は新人が多いな……」

中分けの革ジャケットを着た青年がその雑誌を見ながら呟くと金
髪を逆立てた青年が

「油断大敵！だぜ？」

と茶化すように言う。続いてごつい柔道家も

「うむ、紅丸の言うとおりだ。京、十分に気を引き締めるのだぞ。」

それに革ジャケットの男 京は

「それは年中気イ抜けっぱなしで草薙さん！とか言ってる真吾に言
うべきじゃねえか？」

そう言つとそのまま誰にもなく呟く。

「なべて世は事もなし……か。誰かが言った言葉だな……クソッ……どうも

すっきりしねえ…」

「どうしたんだ京、随分センチじゃねえか。」

紅丸の問いに京はホテルのソファで寝返りを打つふりをしながら視線を外し、

「知るかよ…」

と会話を打ち切った。

その夜京は夢を見た。夢の中で赤い服を着た青年と自分が対峙していた。その青年が言う。なべて世は事もなし…と。

.....

「ボクは…誰だ…?」

クリーム色の光沢を持った髪 of 青年が頭を抱えていた。

記憶が全くなく、無理に思い出そうとしているかのように。青年の名は灰崎紅蓮と言い、また、ある人物はその容姿を見てこう呼ぶ。アッシュ・クリムゾン…と。

「まあ、じっくりと記憶を戻していけばいいよ、灰崎くん。」

白髪の青年がニコリと微笑みながら灰崎に声をかけた。後ろには無精髭のラフな格好をした赤毛の男と緑色の髪 of 男が続いている。

「済みません、ありがとうございます、白蘭さん。」

「いいのいいの、気にしないで、ね、ザクロも桔梗ちゃんも問題ないよね?」

その問いにザクロと呼ばれた赤毛が

「あ〜っと…めんどくせ〜けどま、やるだけやってみますよ、雑誌にデカデカと

書かれちゃってるし。しゃあねえっすよ。」

と答え、桔梗が詫びる。

「済みません灰崎殿。私は白蘭様にむしる進言しようかと思っていたところでしたから。」

ハイハイ。と白蘭が手を打って話を打ち切る。

「じゃあそつ言つこととで、灰崎くんが引つ掛かりを感じたこのKOF

「出るよ。」
「ハッ！」

第一試合 動き出す牙、闇の爪

『さあ、三年ぶりに開催されるKOF、だいてKOF RETURNS
！ここ、並盛中学校を始め、サカザキ道場、東京駅前、ギースタワー、
万里の長城、99決勝ステージ、決勝ステージ、旧ネスツ地上基
地にて一回戦の火蓋が切って落とされようとしています！ここ、並盛
中学校ではボンゴレチーム対韓国チームが行われます。三年前に一
度終幕を迎えた旧KOFにおいて常連であった韓国チームに新星、
ボンゴレチームがどこまで食らいつけるかが見物です！』

テンションの高いアナウンスの後、参加チームが校庭にて火花を散
らす。

ワーワーという歓声に混じって特定の人物を応援する声も聞こえ
る。

『さあメンバー紹介に移りたいと思います！まずはボンゴレチーム！
リーダーは沢田綱吉！並盛高校に通うごく普通の高校生でありなが
ら一部では空を飛んだり凄まじいスピードで只者とは思えないよう
な人間と渡り合ったりと言った目撃情報もある謎多き人物！』

ツナくん！がんばってー！負けたら許さないもんね！負けてき
てみる、ねっちよりコースだぞ。

『副将は山本武、中学時代六打席連続本塁打を達成した驚異のスラッ
ガー！今回は峰打ちのみという指定で

剣術を用いての参戦です！』

「ツナは人気だけど俺は普通なのな。」

黒い短髪の山本の台詞にツナは青白い顔で

「でもねっちよりがない分そっちが良かったかも…」

山本も負けたらねっちよりだぞー

「…みんな負けたらねっちよりなのな…」

『さあ、選手の皆さんがブルーになっていきますが気にせず参りましよ
う！先鋒は笹川了平！

ライト級最強の高校生ボクサー！座右の銘は極限！ご存じ極限ラ

イオンパンチニストー！」

「うおおおおおお!!!きよくげえええええん！」

白髪の芝生へアーの了平のアナウンスや歓声に負けない叫びを聞き、隣にいた銀髪、獄寺隼人が舌打ちして

「相変わらず五月蠅くてウゼー芝生だぜ…」

と言つとそれをかき消すようにアナウンスが

『続いて紹介するのはこの試合、ストライカーとして参戦する獄寺隼人！』

と言つたので満更でもなさそうに口を閉ざした。

『彼はイタリアと日本のクォーターで、今は日本在住ですがかつてイタリアにいた頃はダイナマイトを自在に操り着火に煙草を用いることから二重の煙よりスモークン・ボムの異名をとっていた凄腕であります！』

獄寺さーん！ファイトですー！アホ寺ー！足引つ張つたらオレっちがぶっ殺しちゃうもんねー！

「ハルからの満更でもなさそうだけどランボからの思い切り舌打ちしてたのな。」

山本がそう言つて見ると獄寺をツナが羽交い締めにして大騒ぎしている。

「放して下さい十代目！アホ牛は俺が果たします！」

「ダメだって隼人！まだ子どもなんだよ！」

「そうだぞタコヘッド！まずは落ち着くのだ！」

「オメーまたタコヘッドつつたな！ツッーかテメーには言われたくねーよ芝生！」

『さあ、大騒ぎしているボンゴレチームは放っておいて、韓国チームの紹介に移りましょう！』

リーダーは暴走する正義！悪は許さぬ熱い男！キム・カツファン

『！』
「無論、私は生涯現役で行くつもりだ！」

白い拳法着のキムの台詞に大男のチャン・コーハンと小男のチョイ・ボンゲがそれを聞いて顔を青ざめさせる。

了平の体にアーマーとなって装備される。

「準備完了！もう良いぞ！チャン、待たせて済まんな。」

「気にすんな。俺も全開のお前と戦いたいからな。さあ、始める実況！」

『それでは、始めましょう！チャン、バーサス！リョウヘイ！ラウンド1！READY...』

空気が張り詰め、睨み合う二人の気迫が場の雰囲気熱くする。そして…

『FIGHT!』

「鉄球粉碎！」

「極限太陽！」

鉄球と右ストレートがぶつかり合い、衝撃が客席となったトラックの外に吹き付ける。

「やるじゃねえか！」

「貴様もな！どンドン行くぞ！極限ラッシュ！」

「おもしれえ！テメエの拳と鉄球の回転と、どっちが速いか試そうじゃねえか！鉄球大回転！」

了平がラッシュを放つとチャンは鉄球を回転させて拳を完璧に防いでみせる。

「どうしたア！テメエの拳はそんなモンか！」

「まだまだア！スピードアップだ！」

極限ラッシュのスピードが鉄球の回転速度を上回り、大きく弾く、そしてチャンの腕が大きく上に弾かれ、懐がから空気になる。

「面白かったぞチャン・コーハン！だがこれで決めさせてもらう！極限！」

「まだだぜ！」

了平が構えに入ったところでチャンは弾かれた勢いを利用して大きく飛び上がった。そして叫ぶ。

「m…えーっと…位置エネルギーはお前のモンだアアアアアアアアアアア！鉄球大圧殺！」

「受けて立とう！極限イングラム！」

了平のステップにより分身した拳とチャンの巨体がぶつかる。

やがてガハツという声とともにチャンの巨体が地面に崩れ落ちた。

「ヌウ…楽しかったぞチャン・コーハン！今度特盛りの牛丼をたらふく奢らう。」

「ゼエ…ハア…ハア…良いのか…？」

「無論だ！すでに俺とお前は極限と書いて友と呼ぶ関係にある！」

「楽しみにしてるぜ…」

そしてチャンが気を失うと実況が声を張り上げる。

『勝者、笹川了平！続けて戦いますか？』

「いや、俺も拳を痛めた、交代できるのであれば山本がかわってくれるか？」

「ああ、良いぜセンパイ！」

それでは、と実況が再び声を上げる。

『副将のお二人、チョイ・ボンゲと山本武、登場して下さい！…ってえっ！?』

実況が驚いたのは山本とチョイがすでに刃を交えていたからだ。

「なかなかやるな、アンタ。」

「アンタもクソガキとは思えないでヤンスよ？」

言いながらも一太刀もう一太刀更に一太刀と太刀筋を重ねる。

「時雨蒼燕流攻式八の型篠突く雨」

「躲して猿突きでヤンス！」

「まだまだ！」

「次でヤンス！」

「どうだ！」

「キョキョキョキョキョ…」

やがて二人は離れて構え直す。

「そんじゃまあ…」

「小手調べは終わりでヤンスね。さあ、早くあの小僧がやったみたい
に形態変化

「とか言っのを見せてほしいモンでヤンス！」
「だったら…」

と山本はネックレスに手をかけて言う。

「見せてやるぜ！小次郎！形態変化！」

ネックレスから現れた青い炎を纏った燕が刀と合体し、山本自身も和服と二刀流になる。

「こつなったら峰打ち以外の手加減は……」

そう言いながら山本が鋭く踏み込み……

「出来ねえぜ……」

「お騒がせしましたアアアアアアアアアア！」

チヨイが遙か彼方に吹き飛ばされた。

「アツハハハ！ちよっとやり過ぎちまったのな！」

『決着ウー！勝者山本武……』

「対象はツナに譲るぜ！」

山本がそう言って下がり、かわってツナがトラックの中央に出てくる。

「しょうがないな、じゃあ大将戦は……」

『沢田綱吉対キム・カッファン……』

「かかってこい！」

キムが構え、ツナが体を少しだけ硬くする。

「来たまえ、私が後手だ。」

「はい、では。」

ツナが凄まじい早さで近づき、正拳突きを放つ。

「早い！クッ……」

キムがそれをぎりぎりで躲し、ツナは右の拳を握りしめる。

「行きます！カッコだけビッグバンアクセル！」

コークスクリューがキムの顔面を襲つ。

「やるな！だが！鳳凰飛天脚！」

顔を少しだけずらしてツナの拳を躲すとキムは真上に蹴りを放つ。

ツナもそれを少しだけ体をずらして躲すと軸足を払いにかかる。

「ぬっ……」

足が払われて体勢を崩したキムにすかさずカッコだけビッグバンアクセルを打ち込む。

「ゲハッ！グッ…くあっ！」

腹に拳が入ってひるみつつもキムはその腕を絡め取って固め、さすが蹴りを放つ。

「ぐはっ！」

そしてツナの突きとキムの蹴りが交錯し、両方突き刺さる。

「く…やりますね…」

「ああ…君もなかなかですね…ですが…」

「ええ…負けるわけにはいきません…」

「「」で決めます！」

キムが片足を振り上げる。

「ネリチャギ！」

ツナはその踵落としを手の甲ですらす。

「霸気脚！」

踵落としの勢いで足を思い切りツナの脛に叩き付ける。

「グッ！」

「流星落！」

そして霸気脚の勢いでスライディング、そして踵落としに入る。

それをツナが防御、キムは続けて流星落の姿勢から前に飛び出す。

「鳳凰脚！」

「カッコだけビッグバンアクセル！」

キムの突撃を躲し、ツナは再び拳を繰り出す、単発ではなく連続でたたき込まれる

攻撃にキムがひるむと

「うまく決まるか分からないけど…カッコだけ鳳凰脚！」

膝蹴りの姿勢で思い切り飛び出し見事に鳳凰脚を真似て見せてキムを倒した。

…

『一回線第一試合、勝者は全ラウンド勝利の新星、ボンゴレチーム！』
なかなかやりますね、と黒い影が言った。

そこは11の影があり、暗い部屋だった。

一人がジヴァートマ、少しお遊びが過ぎるのではないかと問うと影がもうひとつ

そうだな、別にこのような大会を開かなくてもこれまでの常連を何らかのエサで釣り、連れてくれば良いだけではないかという、それに7つの影が相づちを打つ。

いやいや、と最初に言葉を発した影、ジヴァートマが首を横に振り、量より質ですよと言う。

その後も10の影が会話を続けたが一つだけ一言も発しない影があった。

おや、とジヴァートマはその影に顔を向けて言った。

ユーダイム、貴方は何も思うところはないのですか？

ユーダイムと呼ばれた彼は答えない、実動隊の人形と見なされた彼には言葉が存在しない。

いや、奪われたと言うべきだ。

(兄貴…)

ユーダイムことソフレ・メイラは自分の意識で体が動いてくれないことに歯噛みした。

第二試合 空手対炎！空を舞う龍と大地の激突！

「何か自分でじぶんち壊しそうじゃ仕方ないんだけど…」

「そつだよねお兄ちゃん。」

金髪碧眼に道着というある種ミスマッチな格好のリョウ・サカザキと同じく道着姿だが黒い長髪を背中に流した少女、ユリ・サカザキはよりによって一回戦の会場が自宅であるサカザキ道場、それもアメリカにある本部であることに嘆息していた。

「リョウったらいきなり何落ち込んでるの？」

男装の麗人キングがその様子にため息をつくとなりにいた顎の割れた伊達男、ロバート・ガルシアが

「まあ、試合が始まればリョウのテンションも上がるやろうできにせんととき。」

と流暢な関西弁でフォローを入れた。

その向かい側では

「大丈夫？ 炎真。」

「俺はストライカーだけどお前は大将だろ？ 戦えなくてどうすんの？」

「結局軟弱だから飛行機酔いなどするのだ！」

「うぷ…紅葉…揺らさないで…」

赤い無造作ヘアの少年、古里炎真が飛行機に酔って蹲っており、チームメイトの女性、鈴木アーデルハイトに介抱されていた。後ろではカンカン帽に顎髭で、でもアーデルハイトと同じで炎真の一つ上の高校3年生というある種インパクトのある加藤ジュリーがあきれたように茶化し、眼鏡の高校生ボクサー青葉紅葉が口癖の結局を連呼しながら炎真を叱咤していた。

するとガタガタという音とともに道場の入り口をほんの少し破壊しながら放送席が設置され

『さあ、第一試合はボンゴレチームの勝利で幕を閉じましたが第二試合はどつでしょうか!? まずは優勝候補の極限流チーム!』

実況の男がうつむくリヨウを示し

『今は自宅がえらいことになるのを警戒していますがご存じ、霸王翔吼拳と竜虎乱舞という二つの強力な武器を備えた大会屈指の強力選手！無敵の龍、リヨウ・サカザキ！』

『シモンチームのお前ら！頼むから道場壊すなよ！』

『そしてその相棒と言えばもちろんこの人！自称美形キャラの最強の虎、ロバート・ガルシアー！』

『自称ってなんや！どついつ事や！』

『ぶつちゃけた話、美形会議でこっぴどくこき下ろしてた京は現実でも女性人気高いですよ？』

『ごめん、悪かった。頼むからそう言つ心の折れる話はやめてくれ！』

『続いてさらわれたり家でしてちゃっかり別のチームを作ったり親父をアップパーカットで吹っ飛ばしたり、まさに奔放なる飛燕！ユリ・サカザキ！』

『ちよつと！これって中傷の部類に入るんじゃないの!?!』

『まあまあお気になさらず。続いてご紹介させて頂きますは男装の麗人、リヨウとはちよつと良いカンジ？のキング！』

『満更でもなさそうな顔してるでこいつ…』

『なにかいった？』

『いいえ何にも。これっぽつちも喋ってへん。』

『続きましてはシモンチーム！リーダーはこれまた謎の高校生、並盛高校2年A組、ボンゴレチームリーダー、沢田綱吉とは親友の古里炎真！今は全く威厳ありませんけどね。』

『大分楽になってきた…でもこの実況ちよつと悪意を感じる…』

『先鋒は笹川了平のライバル、高校生ボクサーの青葉紅葉！』

『結局この僕には中傷はなしだな！』

『扱いにくいですから。』

『結局…!?!』

『続いて紹介するのは老け顔高校生の加藤ジュリーと堅物女子高生の鈴木アーデルハイトー！』

『扱いづらいからってまとめるな…(まとめないで…)』

『それではラウンドー！コウヨウ！バーサス！ロバート！READY
…』

そのアナウンスで空気が変わった。

『FIGHTー！』

「最強の虎の復活や！じつくり拝み！」

「結局僕が勝つー！」

ロバートと紅葉の拳がぶつかり合う。

「ほおお、結構やるやないか。」

「結局僕の拳にカウンターをあわせ拳をぶつけるとは、顔に似合わず
きよつじゃないか。」

じゃあ、と紅葉の鋭い拳とロバートの豪快な拳が交錯し、二人の肉
体を打つ。やがてどちらともなく息を乱し始め、肩が落ち始める。

「ハア、ハア、やるではないか…ハア、ハア、結局この僕に僅差で敗れ
るところまで来ているのだからな。」

「ゼエ、ゼエ、そらないわ、僅差で負けんのはお前の方や。誇り高きヤ
ングタイガー、ナメとんやないで」

ふっと二人は唇をゆるめ、同時に

「言ってくれるな（言ってくれるやないの）」

と呟き、拳を握り直す。

「滅！龍・虎・乱・舞！」

先に動いたのはロバートだった。一気に距離を詰め、無数の乱打を
放つ。

「どないや！結局ワイの勝ちやったやろ！」

眼鏡が吹っ飛びよろめく紅葉に向けて両手を引いて構え、

「霸王！翔！吼！拳！」

と、虎の形をした巨大な霸王翔吼拳を放つ。だが、

「ドアホウが！結局貴様の敗因は僕の眼鏡を吹き飛ばしたことだ！」

紅葉は普段見えない眼鏡でセーブしている視力を使い、霸王翔吼拳
を紙一重で躲す。

「なんやて！」

「貴様は全身がキラースポット！結局次の一撃でこの試合は終わるの

だ！」

紅葉の拳がロボートの腹に突き刺さり、ロボートが倒された。だが。

「クソッ…結局相打ちと言っことか…」

と言っって紅葉も倒れた。

『さあ、どんどん参りましょう！アーデルハイト！バーサス！ユリ！』

READY……』

「容赦はしないわよ」

「負けないよ！」

『FIGHT……』

二人が掛けだし、扇子と拳が交差する。

「やるね！」

「あなたもなかなかのものね」

二人の攻撃が交錯し、交わる視線が火花を散らす。

やがて、どちらともなく決着をと考え始める。

「疲れたから早く決着付けようよ。」

「次に貴方のお兄さんが控えているものね。」

そしてユリはより強い一撃を繰り出すために構え、アーデルハイトは扇子をしまい、指輪をはめる。

「まさかこんな表舞台でシモンリングを使うなんてね。」

指輪から氷が走り、空気中の水分が凝結、氷の人形が形成される。

「行くよ！ちよう！竜虎乱舞！」

「氷人形無限乱舞！」

大量の人形が竜虎乱舞で碎かれ、最後の一体をストライカーとして飛び込んだキングが碎き散らす。

人形が一つ残らず砕かれたところにアップパーカットがたたき込まれ、最後に放った氷の弾丸にユリが吹き飛ばされ、相打ちと相成った。

「大丈夫かい？アーデル？」

「…苦労様、ユリ。」

さてと、と二人をねぎらった後両チームのリーダーが前に出る。

「思ったより出来るじゃないか。じゃあ俺も極限流の真髄、見せてや

るよ。」

「僕も最初から炎を使わせてもらいますよ。」

リヨウが構えをとり、炎真が額に炎を灯す。

「面白いじゃないか！道場の修繕費、出してくれるよな？」

「ええ、経費で落としてやりますよ！じゃあ、ツナ君の決め台詞を借りて…」

「ここで炎真は言葉を切り、構えをとって言う。」

「えっ…と…やっぱりちょっとアレンジして…死ぬ気で貴方を倒しますー！」

「おもしれえ、そこまで言うなら死ぬ気で来い！キング！」

「ああ、手出しは無用、でしょ？」

そして二人はかけ出し、ちょうど中間でぶつかり合った。

「やあっ！」

「そらっ！」

気迫とともに鋭く拳を繰り出し、もう片方の手で受け止める、すかさず蹴りを繰り出すと少し体勢を変えていなす。

蹴り、突き、フック、アッパー、肘、膝、裏拳、後旋腿と、様々な

基本技が飛び交い、地味だが激しい戦いが繰り広げられる。

「埒があかねえ！おらっ！」

リヨウがしびれを切らして炎真に鋭いボディブローを放つ。

「ぐっ」

怯んだところへ連続して拳がたたき込まれる。

「ぐはっ」

「どうだ！極限流空手、暫烈拳は！」

とどめにただのアッパーカットを放つのが常だった、だが常に戦い方が進化するのが格闘家、リヨウも暫烈拳を進化させている。

「完成！暫烈拳改！」

虎砲と呼ばれるアッパーカットを放ち、自身も飛び上がる。そしてそこから両手を組んで突き落として見せた。

だが、炎真も負けてはいない、掌から重力を持った球体を飛ばして動きを封じ、続けて自分に重力を使って反動を殺して親友の技を真似

あ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お」

二人の喉から猛りあがる咆吼。

気迫と気迫がぶつかり合い、大熱量の旋風を巻き起こした。そしてそれと同時に吹き上がる粉塵。

つまり、二人の最高の力がぶつかり合った結果、道場の屋根をぶち抜く大爆発がおこったのだ。

煙が晴れるとそこにはふらつきながらもなんとか立っている、しかし吹けば飛ぶような頼りない印象を周囲に植え付けるほどにボロボロのリョウと膝を着き、肩で息をしながら喘ぐ炎真だった。

『決着ウー！すばらしい激戦を制したのはわずかに地力で勝ったリョウ・サカザキ！よって、一回戦は極限流チームの勝利です！』

「フウ…お疲れ様、リョウ。」

「ああ、すまんなキング。」

「まあ、よく頑張ったんじゃないの？俺としては後が怖いけど、確か並盛高校にあの赤ん坊がやってきて言ったんだよね？負けたらねっちよりコース…って」

「ハア…ハア…ハア…ねっちよりはイヤだけど楽しかったから…僕は満足…だけどね…少し…眠らせ…て…」

ジュリーと会話している炎真にリョウが問いかける。

「なあ、無名でそこまでやるってすげえな、世の中には強い奴がゴロゴロしてるのは分かるが、あの炎は一体何なんだ？お前は一体何者なんだ？」

その問いに炎真は小さく

「自警団由来のマフィア…ですよ。あの炎はこのリングの力…このリングは僕しか使えないんですけどね…」

「すみません…続きは…また…起きたときにでも…スウ…」

そこまできっちり喋ってから眠りについた炎真にユリとロバートは

「いててて…律儀な人だね…」

「あたたたたた…ホンマやなあ
と呟くのであった。

.....

「さて、戻るぞふたりとも！」

「ちょ、ちょっと待つでヤンスよ！」

「そつだぜ！急ぎすぎじゃねえか！」

「やれやれ、韓国在住はこついつ時大変ですね、道場ごと移転してはどうです？」

韓国チームの四人は言い争いをしていた。並盛中学校校庭にてボングレチームに敗れた彼らはすぐに韓国に

帰国すべきか否かで言い合いをしていた。

まず、すぐにも戻って更正という名のシゴキをしようと思えるキム、対してチャンとチョイはすぐに戻らされてしごかれるのが嫌なチャンとチョイ、そしてそれを面倒臭げに俯瞰しているジョンであった。

そこに実況がやってきて韓国チームの面々に

「あの…これから先の試合を出場選手は無料で観戦できるので、よろしければ他の試合もご覧になられてはいかがでしょうか？二回戦以降になりますかひょっとすると新世代チームが勝ち上がるかもしれませんよ。息子さんの試合もご覧になられては？」

「そつだぜ旦那！ひょっとするとなんかのヒントが見つかるかもしれねえぞ！（少しでも長く修行に戻るまでの時間を稼がねえと！）」

「アッシは見てみたいでヤンスねえ、さっきのボングレチームみたいな奴らが常連とどんな戦いをするのか、見に行くでヤンスよ！（チャンの旦那、アッシもアンタと同じ考えでヤンス！）」

「私も観戦ぐらいなら許可しても良いと思いますよ。うまくいけば彼らに更正の意志を強めさせることも出来る。（それにアテナさんも絶対に勝ち上がってくる！）」

三者三様のダークな意思統一に押されてキムも了承した。

第三試合 KOFの主役、来る！親父狩り狩り狩り

？

「あゝ、何で…初戦の相手が…」

京が東京駅のベンチに座ってぼやいている。

「むづ…やりづら…」

大門も反対側のベンチを見ている。

「あゝ…どつすりゃ良いんだこの空気…」

紅丸がぼやきながらタクシー乗り場とバス乗り場を交互に見る。

「真吾さえ遅刻する始末。中継見てるとシモンチームが極限流チームに負けてもう少いでこっちの試合も始まるってのになにやってんだあいつは！」

「さっきから何本かバスが来たりタクシーも何台が来ているが真吾は一向にこん」

すると道路を挟んだ向こう側から黒いシャツの上から白いライダースジャケットを羽織った青年が息を切らせてやってきた。

彼が3年前は京を真似てバンダナに短ランという出で立ちだった矢吹真吾だ。と言うと京の真似は卒業したように思えるが実のところこの服装も京のバンダナに短ランの次に着ていたものを自分なりにアレンジしたものだしそもそも格闘スタイルも草薙流古武術＋我流拳法と、京と同じである。押しかけ弟子だからしょうがないといえましょうがないのだが。

「すいません草薙さん！電車乗り損ねちゃって金が続くとこまでタクシーで来たんですけど金が足りなくて東京へ入ったあたりからは走ってきました！」

息せき切って話す真吾に紅丸がスポーツドリンクを渡す。一息で飲みきった真吾は

「さあ、体力回復完了！行きましょう！草薙さん！紅丸さん！大門さん！」

と叫んで自ら先鋒となった。

『さあ、選手もそろったことですし試合を始めましょう！まずは日本チーム！先方は若き未完の大器、草薙京の押しかけ弟子の矢吹真吾！』

「へ？紹介も一番なの？やった！行かせ真吾！」

『続いて次鋒、大企業の御曹司にして超一流の格闘家！閃光の美学こ
と二階堂紅丸！』

「オレ大人気！thank you！」

『大將はもちろんこの人！焰の貴公子、KOF優勝経験があり、欠場も
したことがないまさにミスターKOF！草薙京！』

「派手だねえ、まあ、気まずい空気も吹っ飛んだし…行くか！」

『対するはおやしチームNEO！先鋒はMr・カラテこと、極限流創
始者、タクマ・サカザキ！』

「ウム」

『次鋒、通称キョーヤジ、草薙京の父、草薙流古武術先代継承者、草薙
柴舟！』

「京、調子に乗るなよ！」

「…」

「無視か！」

『大將は遅しき泥の男！沢田家光！』

「奈々〜！見てるか〜！」

『ストライカーは日本チームが元オリンピック柔道金メダリストの大
門五郎、おやしチームNEOが隻眼の傭兵、ハイデルンです。』

バスのロータリーに真吾とタクマが進み出た。

「タクマさん、手加減しませんよ！進化したオレ式、見せてあげます
！」

「うむ、かかってくるがよい。」

『それではラウンド1！シンゴ！バーサス！タクマ！READY…』
『FIGHT…』

「極限の拳、しかと見よ！」

「クールに行こうぜ、真吾！」

まずはタクマが腰の入った正拳突き、猛虎無頼岩を放つ。それを真

「柴舟さんじゃ勝てんわな。」

「うむ。だが、問題は…」

「ああ、最後の一人のあのおっさん、だな。経験豊富で強いあの連中、まあ一部若造に瞬殺される俺の親父もいるわけだが？ハイデルンが出番を譲る程の強者、一体何モンだ？沢田家光…とかいったな。」

『おやじチームMNEOの大トリ沢田家光が登場！試合を始めて下さい』

「行きますよ！真オレ無式！」

「よし来い！」

そして、真吾が放った始動の一撃は空を切る。家光が上体をほんのわずかに反らして躲したのだ。

そして一瞬で額に炎を灯した家光は炎を纏ったボディープローを放つ。

「そらー！」

「ゲハッ！！…なっ…ゴフッ…！参った…」

『決着ウー…！恐るべき強さ沢田家光！大きく成長した矢吹真吾がゴミの様だ！驚くべきはそれほどのパワー！一体彼は何者なのかああー！』

「マジかよ…これじゃあ俺は捨て石か…まあ、捨て石は捨て石らしく、おっさんの体力を少しでも多く削ってやる！」

紅丸が決意して進み出る。

チリッという音と共に紅丸の両手にスパークが纏われる。

「行くぜ！」

「来い！」

いきなり紅丸が駆け出し、電光を纏った正拳を打ち出す。

「おっと！」

紙一重で躲した家光だが、紅丸が不敵な笑みを浮かべ、拳に集めた電気をスパークさせる。

怯んだところへ紅丸は本命の必殺技、雷光拳を放つ。

そして痺れている間にサマーソルトキック、着地してすぐに幻影による数度の突進攻撃、自分に雷を落とし前方にその雷を打ち出す。

「ああ、分かったぜ…おいおっさん！今すぐ最終戦だ！」

「おう、いつでもきな。」

京と家光の視線が交錯し、直後、二人が駆け出す。

「燃えろオ！」

「ウオリアー！」

京と家光のフックがぶつかり、綺麗なオレンジと燃えさかるオレンジ、2種類の火の粉が飛び散り、

東京駅に凄まじい熱量を振りまく。

「ままだぜ、おっさん！」

「あのなあ…おっさんじゃなくて家光さんと呼んでくれないか？」

「だれが！」

言いながらも二人の拳は速度をゆるめない。

最大速度の拳が激突しては火の粉を振りまき、再び激突する。

やがて、紅丸戦の疲れと体力の損耗が出てきたのか家光の動きが鈍り出す。

その隙を見逃す京ではなく、

「遊びは終わりだ！」

両手で家光の胸倉をつかんで爆発を浴びせ、全身に炎を纏つての両手による連続フック。続けて半歩踏み込んでの肘によるかち上げ、さらに踏み込んでの肘鉄、右、左と顎を蹴り上げてからの飛び上がりながらの裏拳を決める。

「どうだ！伍百式拾四式神塵だ！」

「まだ…だ…」

「だったら！最終決戦秘奥義、十拳!!」

炎をチャージした拳で大きく殴り飛ばし、続けて

「天叢雲！」

立て続けに火柱を叩き付ける。そしてさらに

「これが！本当の無式だあ！」

そして始動に炎を使った草薙流本来の無式を放つ。

「見せてやる！草薙の拳をオオオッ!!」

「ぐおあああッ!!」

右のフックを四回、左を四回、肘で四回かち上げ、さらに踏み込んでもう一度肘鉄、最後に飛び上がりながら裏拳を放ち、家光を地面に沈めた。

「フンッ、歴史が違っんだよ！」

京の勝利で第三試合が幕を閉じた。

第四試合 真っ黒X真っ黒

レザースーツの青年が気愈そうに呟く。

「めんどくせえ…なんだって俺がこんなトコに来なきゃなんねエんだ」
「？」

それに対して明らかに普通ではない格好の大男が

「まあそう言うな、一種のデモンストレーションだ。」

と言い、続けて軍服に身を包んだ少女も

「そうそう、下手に私たちに手を出すとえらい目に遭うよ…って大々的に見せつけてやらなきゃ。」

とフオローする。しかし当の青年は

「じびびしてえ…」

と愚痴るのをやめない。

そこへ少女の大きな声が割って入った。

「ねえねえK…この人凄いなだよ！セーラもおじさんも見てよこの人」
「！」

栗色の髪のレザースーツを纏った少女が頭一つ分背の高いレザー
スーツの青年、K、の手をつかんで言う。

サングラスをかけた顔からは一見これといった感情が見受けられないがよく見ると顔がほんの少し赤くなっていることがわかる。

「登録はウィップなんだからセーラは無し、お願い。」

軍服の少女ウィップが訂正し、おじさんと呼ばれた大男が少し悲しそうに

「あのなあ、クーラ、俺のことはマキシマって言うてくれよ。頼むから、もう本当に30過ぎたからおじさんは来るモンがあるんだ。で？
そのガキは？」

「ああ、この人？この人は犬って言うてね、変身するの…」

クーラがK、の腕をつかんだまま手をぶんぶんと振り回し、はしゃぐが、どこか連れてこられた犬という青年は所在なさげに呟く。

「オレ、どっすりゃいいんねすか？」

「あ、そうだそうだ！犬！あれやってよ！あの、サツとやってガオ〜ツてなるヤツ！」

「なあ!?じゃあ、しょーがねえけど…じゃあ…そこのおっさんにかけて…これ！」

犬が歯の形をした何かを歯に重ねると犬の体に変化し、まるでゴリラのようになつた。

「ね？凄いでしょ!?この人、変身するし…おじさんみたい！」

「ごついマキシマとゴリラ風の犬、二人のシルエットがよく似ているのでクーラがはいでいるがウィップは

「そうかしら？」

と首を捻り、マキシマは

「どこがだあ！全然似てねえだろうが！M2型ぶっ放してやろうか！」

と叫ぶがK・に比べればマシである。K・など右手から今にも炎を出しそうになっているのだ。

「テメエ…いっぺん焼いてやろうか…」

「ん、あ、あ、っ!?無駄にこええ！分かったよ！サツともう一つだけ使って消えるぜ！カンガルーチャンネル！」

脚力が上がった犬が大きく万里の長城の遙か彼方に飛んでいった。

「もう！何でいつもこうなのよ！」

クーラに叱られたK・は

「す…すまん…」

と小さくなつた。一方の犬はと言つと

「あつれえ〜…?骸さ〜ん！かーきピー！バカフライン！どこ〜!?」

チーム黒曜のメンバーの彼は他のメンバーを探し始めた。数秒後、放送で呼びつけられた犬はそこへ行く途中で迷つのであつた。

.....

「で？あの犬とか言う野郎…対戦相手だつて知ってたのか？」

「知らないよ。」

「そうか…」

クーラとK、がボソボソと対戦相手をチラ見しながら話している。
その対戦相手も

「犬…どういうつもり…?」

「全く…手間がかかりますね…」

「らってしよーがないれしょ!?こんな広い上に人もいっぱいいるんれすもん!」

「犬ニーサン、つくづく落ち着きのない人ですねー」

『さあ、両チームいろいろ揉めていますますがメンバー紹介に移りましょー!まずはK、チーム!』

「あっ!K!始まったよ!」

「分かってる…」

『まずはサイボーグのあの方!ご存じ鋼のヒューマンウエポン!80%機械のモミアゲゴリラ…マキシマ選手!』

「M2型ぶち込むぞゴリア!」

『続いて紹介するのは氷の美少女、クーラ・ダイヤモンド!』

「やったあ!私ほめられちゃった!」

「良かったな。」

『次はストライカーのムチモといウィップ!』

「大佐かアンタは!」

『最後は先鋒にしてリーダー!Kを超える者!孤高の狼、K、ツ!』

「俺一人で十分だ…」

「カツコイイよK!」

「そ、そうか?」

『続いてチーム黒曜!先鋒はダウンナーなヨーヨー使い、柿元千種!』

「…」

「千種、何かコメントしなさい。」

「ハイ…がんばります…」

『次鋒、ワイルドビースト、城島犬!』

「ヒヤッホー!」

『ストライカー、イタリア産青森リンゴ、フラン!』

「ミーはリングですかー？」

『リーダーは冥界からの使者、幻惑のパイナツ…幻惑のオッドアイ、六道骸！』

「犬、貴方のせいですよ。」

「へ？」

ドギヤアアアッ！

「キャキョーン！」

『それではラウンドー！チクサー！バーサス！ケイダツシユ！READ
Y…』

『FIGHT…』

「俺一人で十分だ…」

「すぐ壊す…」

千種がヨーヨーを取り出した、しかしその時にはK・がすでに懐に滑り込んでいる。

「シヤラアアアッ！」

「ぐ…」

蹴り飛ばされた千種に向けて右手を突き出し、K・が全力で突撃をかける。

「ヒートドライブ！」

「がッ…」

圧倒的戦闘力を持ってしてK・が千種を秒殺した。

「さあ、次はテメエだ…焼き殺してやるから覚悟しな…」

「何か怖いんれすけど!？」

「そりゃそうだ、怖く見えるように言っただからな…」

そう言いながらK・はサングラスを犬に向けて投げつける。

「イテッ！あにすんれす…」

「終わりにしようぜ…オラオラオラアアアアアアアッ！」

サングラスが当たって少ししたじろいだ犬に向けて恐ろしい程の気迫と右手の炎を乗せた連打が襲いかかる。

「じゃあな…ヒートドライブ！」

「んぎゃああああああ…」

犬を思い切り吹き飛ばすがK、はこの程度で済まさない。

よろめきながらも立ち上がった犬に向けて歩いて行き、すれ違ったところで止まる。

「黒だよ…」

「んあ？何か熱い…」

犬のモスグリーンのジャケットから少しずつ炎が漏れる。次の瞬間

「真つ黒オ！」

大爆発。犬は声もなく気を失った。

「やりますね、あの犬がここまでさくつと…というか貴方から半端じゃない殺気を感じるのですが…」

「テムエら…戦って気付いたが俺らと同類だろ。」

「と、申しますと？」

「とぼけんじゃねえ、人体実験の被検体さんよオ、気付かねえとも思ったか？俺と同じ臭いがするんだよ…」

ほう。と骸の目が細められる。右目が漢数字の刻まれた紅、左目が吸い込まれそうな青のオッドアイ。

その持ち主の青年が訝しむように尋ねる。

「では貴方もエストラーネオに？おかしいですね、僕の知る限り貴方のような人間はいませんでしたが…」

んだそりゃ？K、はそう呟くと

「俺らを改造したのは3年前に世界を騒がせた組織さ。ネスツだよ、ネ・ス・ツ。分かるか？」

「ほう…エストラーネオ以外にもそんな腐った組織が存在するとは…腹が立ちますね。」

「だろっ…？さて、ご託はもう良いだろう、かかってきな。」

「ええ、では最初から…」

骸はそう言つとイヤリングから藍色の炎を纏ったフクロウを呼び出した。

「本気で行きますよ！ムクロウ！形態変化！」

骸の握った三叉槍にフクロウが同化して錫杖のような武器になる。

「まずは幻覚抜きに格闘戦といきましょう。」

「こっちも炎は無しだ。」

骸の右目に刻まれた漢数字が四になり、右目に紫の炎を宿す。そして凄まじい速さでK・に肉薄し、錫杖を振り下ろす。右手のグローブでそれを受け流し、左のワンインチを放つ。

それを体を少しずらしてかわす。

いなし、打ち込み、躲し、受け流し、叩き付け、蹴り上げ、突き、横に薙ぐ。

数分間の均衡を経て骸が少し距離をとった。

「では今度は幻覚有りで行きます。」

言つやすぐに錫杖を地面に突き刺し、暗闇に無数の一から六までの漢数字を刻んだ瞳が浮かぶ空間が形成された。

幻覚を見せられると言つことは知覚のコントロール権を剥奪されたことを示す。

「何ッ!？」

つまり…という声が響き、暗闇に六人の骸が現れる。

「……」為す術もなく遊ばれるのみ…ですが、6対1で戦うだけに留めましょう、ただし、本体は一人。貴方に見つけ出し、一撃で沈めることができませんか? 「……」

そう言つて躍りかかる骸。しかしK・は表情を崩さずに左手に赤い指輪をはめて不敵な笑みを浮かべた。

「ああ、見つけられるワケねえ、だが、一掃なら出来る。ちょっと前に相手したヤツからの戦利品のお陰でな。」

そして右手にネスツに移植された草薙の炎を、左手に指輪から迸る紅蓮の炎を宿し、

一気に地面に叩き付けた。

「……」何ッ!？」

六人の骸がまとめて吹き飛び、一人を残して消え失せる。

「やりますね…まさか僕に…」

そう言つて残った骸が右手を目の前にかざす。

「このスキルを使わせるとは…」

手を下ろすと骸の右目には五の文字が浮かんでおり、体に黒い斑点が現れる。

「なッ!?…一撃だけだぜ」

「分かっていますよ。どのみち人間道は長時間の使用に向かない。一撃で終わらせましょう。」

そして二人が駆け出す。

ちょうど中間のあたりでぶつかり、二人が離れる。

「黒だよ…」

とK・が呟き、骸が顔色を悪くしながら

「ふ…やりますね…僕が…」
と呟いた。

次の瞬間K・の「真ッ黒オ!」の声と共に骸の胸元で爆発が起こった。そしてその一瞬後K・の左肩

から血が噴き出した。しかし骸は倒れ、K・は倒れなかった。

『勝者、K・チーム!』

.....

「いつつつつ…おい、マキシマ!何でもねえつつつたるうが!」

左肩への処置を終えたK・はそれでも心配そうになにくれと様子を聞くマキシマに向けて怒鳴り声を

上げ、そして痛そうに顔をしかめた。

「そら見る。お前は前から無茶すぎるんだよ。傷口を焼いて止血して包帯巻いて…それで済むわけ

無いだろっが!」

「何もしねえよかマシじゃねえか!フザケてんのか!」

喧嘩し始める二人にクーラが

「まあまあ、落ち着いてよ二人とも!K・も大ケガしなかったし、勝てたし良かったじゃん!」

わずかに頬を染めたK・はバツが悪そうに首肯した。

(ああ、なるほど…協調性が上がった原因はこれか。)

K・がクーラに恋心を抱いているのを見抜いたマキシマは二人の兄貴分として見守ってやることに決めた。

第五試合 KOFの顔、八神庵、手のかかる連中と
共に来る！

「チーム戦か…くだらないね。いいよ。僕らは三人でストライカーをやる。それで手は出さない。問題ない

よね？」

白い上質なシャツに黒いネクタイという出で立ちのトンファーを握った少年が赤毛の男に聞く。その両脇で

黒髪に白いメッシュの青年と白髪の男が諫めるような声を上げる。

しかし当の赤毛は

「ふん、構わん。どのみち皆自分以外は人数あわせだ。そうだろう？雲雀。」

「まあね、ボス猿とはもうやったし他も敵じゃないからね。八神庵。貴方に一回戦は任せるよ。」

「ふん、いいだろう。手出しは無用だ。」

白いメッシュの青年が白髪の男に向けて

「俺は構わない。クリザリッド、アンタはどうだ？」

「俺も構わない。ただし、危なくなればネームレスが助けに入る。俺達にとっても敗北は困る。ネスツの残党は未だにのさばったままなんだ。構わないな？ネスツを完全に壊滅させる。ゼロだけでなくイグニスまで俺を裏切ったんだ。許せるはずがないだろう？」

目付きを鋭くするクリザリッド。そして四人は会場であるギースタワー最上階の舞台へと踏み出した。

「お、お、い、い！おせえじゃねえかあ！雲雀が無茶でも言いやがったのかあ!？」

スクアアロの大声が四人を迎え、ベルの

「案外あの赤毛が雲雀と喧嘩したのかもよ？しっつ。どーでもいいけど。」

XANXUSとマーモンは何も言わずに実況に早く始めるといって視線を送っている。

その殺気混じりの視線に怯えながら実況が試合開始を告げた。

『そ…それでは一回線第四試合をここギースタワーからお送りします！まずはメンバー紹介！』

俺たちのほうに視線を送り、

『焔の一匹狼チーム！まず紹介するのは元ネスツのお二人！　ことコードネーム、ネームレス！黒炎使いの戦士！そしてもう一人の元ネスツ！イカしたロングコートのカリザリッド！』

「おい…ネスツってこんなにメジャーだったか？」

「あの宇宙ステーション落下事件で一躍有名になっちまってる。仕方なからう。」

「それもそうだ。」

『続いて市長よりもえらい！並盛最強の男！雲雀恭弥！何故群れるの大嫌いというこの人がこの大会に出たのでしょうか！』

「……………」

『そしてリーダーにして先鋒！草薙京、二階堂紅丸と並ぶKOFの顔！暴走する本能！三種の神器！彼の出ないKOFなどKOFじゃない！超常連の八神庵！』

「長い…いいからさっさと奴らの紹介に移れ。」

『は…ハイ！ではヴァリアーチーム、先鋒はイタリア裏社会における恐怖の象徴！残虐なる切り裂き王子！ベルフェゴール！』

「ししっ。かるーく相手してやるよ。」

『次鋒は傲慢と残虐の凶暴なる鮫、S・スクアール！』

「う…お…お…い…!!!覚悟はいいなあ、雲雀に赤毛エエ！」

『ストライカーの強欲蛙マーモン！』

「ムム…蛙はボクじゃないよ…」

『リーダーは傲慢と憤怒のライガー！XANXUS！』

「赤毛…なめやがって…かつ消してやる…」

『では参りましょう！イオリ！バーサス！ベルフェゴール！READ Y…………』

「しししっ 針千本のサポテンにしてやるよ。」

「俺に沈められてからだ。」

『FIGHT!』

ベルがその声と同時に駆け出してナイフを指の間に挟み、拳を繰り出す。

それを体を沈めて躲し、

「百式！鬼焼き！」

紫炎を纏った裏拳で大きく吹き飛ばす。そしてそのままの勢いでベルを地面に叩き付け、床ごとベルを殴りつける。

「あッ…が…」

「闇削ぎ！」

そのまま紫の火柱を立て、叩き付けたベルを吹き飛ばす。そしてそこへ向けて大きく走り、頭をつかみ、床面に叩き付け、今度は爆発で吹き飛ばして追いかけて、二連のショートアッパーからの突き落としで脳震盪を無理矢理引き起こし、ベルを沈めた。

「フン、くだらん。この程度か。カス鮫はこうはいかんだろっな？」

「お、い！…なんでその名前を知ってる!？」

「ふん、まさか本当に言われていたとはな…まあいい、すぐ楽にしてやる。」

「へっ…そのスカした態度、気にいらねえ、三枚におろしてやる！」

スクアーロの峰打ち用模造刀が空気を裂き、庵の炎が模造刀に向けて放たれた。

「変わった炎じゃねえかあ、雲属性でもねえのに紫とはなあ！」

「属性？なんのことだ？これは八神家の炎だ。だが、そんな事はどうでもいい。XANXUSとかいうのとも戦わねばならん。さっさと終わらせるぞ。」

「そつだなあ…行くぜエエツ!!!来い!アロー!」

スクアーロの傍らにどこからとも無く水とも炎ともとれるエネルギー体を纏った鮫が現れ、庵を睨み据える。庵も両腕を顔の前に持つて行き、腰を落とす。

「ディルヴィオ・ディ・スクアーロ！」

アローと共に激しく空間を噛み千切るような突きを繰り返しながら突進するスクアーロ。

「遊びは終わりだ!」

素早くスクアーロの懐に飛び込み、突きが当たる前に鋭い爪で引き裂く。

「!ああッ!」

「泣け!叫べ!」

容赦なく両の爪で斬撃を喰らわせる庵。やがてスクアーロの首を掴んで引き上げる。

「そして…」

アーロが主の危機に突っ込んでくるのも一瞥のみであえて気にしない庵。しかし。

「死ねエ!」

禁千弍百拾壹式八稚女。三種の神器の一角を担う八神家、その名に禁の字を冠するオロチの力を使った奥義だ。

「!あああああッ!…」

アーロが消え、スクアーロも倒れた。凄まじい強さで人間を超えるとすら称される独立暗殺部隊ヴァリアー。

その三強の内二人がたった一人のカタギに倒されたのだ。XANXUSと互角といってもいい程の実力である。

「次は貴様だ。」

「ダハッ!」こいつはいいぜ、沢田綱吉をかつ消す前に最高のエキシビションマッチがあるじゃねえか!」

「お褒めにあずかり光栄だが、勝つのはこの俺だ。すぐ楽にしてやる。」

「行くぜ!…」

XANXUSが両手に光球状の黄色い炎を灯し、庵も両手に紫の炎を灯す。

「貴様のも変わっているな。しかしなんだ? 何故俺の周りには炎使いばかり集まるんだ? 京のオレンジにネームレスの赤黒い炎、それにさっきの鮫の青い炎に、貴様は黄色、そして緑!」

(なんだ…俺は何をいつている…!? 緑色の炎など…)

庵が自分の口から出た言葉に戸惑いを覚える一瞬。その隙を突い

てXANXUSが肉薄し、炎を叩き付ける。

「ッ！百式、鬼焼き！」

炎を纏った裏拳の出始めで攻撃を受け止め、振り抜く勢いで弾き飛ばす。

「百八式、闇払い！」

続いて地を這う紫炎を放つ。

「クソが！ベスター！形態変化！」

XANXUSも指輪から白い毛並みのライガーを召喚し、取り出した銃に融合させる。

ヒストラ・インペリアレ・アニマーレ
「獣帝銃！」

そして獣の形をした銃撃で紫炎を消し飛ばす。

「やるじゃねえか。俺の一撃を返し、さらに俺に獣帝銃を出させるとはな。」

「ふん、その銃、相当な破壊力がありそうだ、だらだらとは戦えない。不意だが一撃で終わらせる。」

「いいアイデアだ。最大出力で灰にしてやる！」

俺の炎が大きくなり、XANXUSも銃口に炎を集める。

「闇払い改、黄泉払い！」

凄まじい大きさの炎が周囲を紫色に染め上げる。

「決別の一撃！」

二つの銃口が並び、凄まじい炎を放つ。

二つの炎がぶつかり合い、大爆発を起こした。その瞬間。

「何イッ!？」

「ぐあああああああああああああああああ！」

俺が爆煙を突き抜け、XANXUSの懐に飛び込むと三本の軌跡を残す強烈な斬撃、八咫鳥を見舞った。

倒れ込み、動かないXANXUS。生きていることは確かだ。

「ククククク…フフフフフ…ハアア…ッハッハッハッハッハ！」

俺の三段笑いがサウスタウンに響き渡り、勝利を告げた。

インターミッション イタリア発、中国及び日本經由アメリカ行き

『…続きましてKOF速報です。一回戦突破チームはボンゴレチーム、極限流チーム、餓狼伝説チーム、K・チーム、炎の一匹狼チーム、アンチ斎祁チーム、日本チーム、ミルフィオーレチームです。なお、二回戦以降はマンハッタンのKOFR特設ステージで行われます。続いて、プロ野球…』

前の座席のポケットから取り出したヘッドホンから流れる音声が大会の進行状況を知らせる。

機内放送でシートベルトを外せるようになったという言葉が流れる。それを聞くと黒髪の少年が窮屈そうに歩き出した。

山本は三人のチームメイトが寝ているので退屈になったので機内通路を歩いている。途中で何人か知り合いが座っていたので少し挨拶して探検する。

「んー…っと…結構普通じゃなさそうな人達だよな…」

と呟いたときである。近くにいた金髪の青年が立ち上がった。

「おいテメエ、だーれがアブノーマルなのかなー？教えてくれねえかなー？エエ!?おい!」

青年「紅丸が山本の普通じゃなさそうという言葉に反応したらしい。その騒ぎに茶色いジャケットを羽織った金髪の男と赤いジャケットを羽織った金の短髪の

青年、テリー・ボガードとロック・ハワードが割り込んだ。

「待てよ紅丸。こいつは別にアブノーマルとかそう言う意味で言ったんじゃないだろうからな。」

「そうだぜ！それにこんな所で電撃使ったら機材トラブルでこの飛行機落っこちるぞー!」

ロックの説得のお陰で紅丸は電撃だけは納めた、だが気は静まっていないようだ。

「じゃあなんのつもりであんなこと言ったんだ?」

そりゃあ…と山本が口を開くと屈託のない笑顔で

「口者じゃなさそうだなって思ったからさ。もちろん強そうって意味でね。」

「おお？分かる？そう、この俺が天才シューターの二階堂紅丸様だ！覚えときな！」

その騒ぎを前の列で聞いていたバンダナの傭兵ラルフ・ジョーンズとサングラスと黒い帽子の相棒クラーク・ステイルは通路を挟んで向かい側に座る同じ部隊の女性、青い髪のレオナ・ハイデルンと顔を見合わせて苦笑した。

少し離れたところでは京が大門と顔を見合わせて肩をすくめている。そしてふと近くに目をやるとマキシマが苦笑をむけてきた。その隣ではK・とクーラが肩を寄せ合って眠っている。

これから戦うことになる人間たちが乗り合わせているとは思えないような機内。

こうしてKOF参加者の乗った飛行機はアメリカへ向けて上空を進んでいった。

.....

「沢田綱吉…」

「京…」

「君は僕が噛み殺す」

「貴様を灰に変えてやる、血染めの真っ赤な灰にな。」

庵と雲雀の着陸態勢に入った飛行機に対する眩きにネームレスとクリザリッドはため息をついた。

一回戦 激闘開始

あゝあゝ、テストテスト、ただいまマイクのテスト中…あゝ…よし
『KOFFRー一回戦の開幕だアアアアアアッ!!!』
うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!

ニューヨーク中に響き渡る大歓声。いよいよKOFの二回戦が始まるのである。

『では出場チームの紹介だあ！まずはボンゴレチーム、初出場ながら高校生のボクシングチャンピオンを初めとした強豪の集うダークホース！続いて極限流チーム、ご存じ常連、極限流空手一門！次は優勝候補！餓狼伝説チーム！ワイルドウルフ、ハリケンアップパーといったサウスタウンの使い手ばかりの優勝候補ナンバー2！更にKチーム、優勝候補で他とは一線を画す特殊性が強みだ！次は炎の一匹狼チーム、超常連八神庵率いる単騎、総合力共に一二を争うぞ！続いてアンチ斎祁チーム、飛賊に武神、天才と総合力にかけては常連にも勝るとも劣らない！更に更にイ！日本チーム！優勝候補筆頭の超常連チームだア！最後はミルフィオーレチーム、ラルフ選手のギャラクティカファントムさえ防ぎきるザクロ選手を初め、歩く八岐大蛇、特殊性及びおぞましきナンバー1の桔梗選手、龍を従えた白蘭選手に謎の青年灰崎紅蓮。まさしく謎のチーム！それでは第一試合！餓狼伝説チーム対ミルフィオーレチーム！』
「oh my good…ギャラクティカファントムまで弾く奴が相手かよ…」

テリーが顔を青くして呟くと隣にいた金の長髪に拳法着のアンデイが

「まあまあ、落ち着いてくれよ兄さん。リングアウトがあるみたいだからジョーがいれば大丈夫だよ。」

とフォローする。追隨して日の丸の鉢巻にトランクス一丁の試合用の正装に身を包んだジョーも

「オウよー！このハリケンアップパーのジョーが全員まとめてリングア

ウトにしてやる！」

と続く。横からいやに露出の多い女性、舞が

「ハリケーンアッパーありきだけどね。」

と茶々を入れたのもジョーの耳には入っていないらしい。

「フフツ、面白いチームだね。とつても強そうだし。」

「ワイルドウルフに全身凶器、ハリケーンアッパーに不知火流忍術継承者、腕が鳴るじゃねえか!!」

白蘭とザクロのいかにも楽しそうな感想に対し、桔梗と紅蓮は

「落ち着きなさいザクロ、今回あなたはストライカーなんですからね。」

「ダイナソースキンで全部弾き返したから戦いにすらならなかったんですから、今回は僕が先鋒ですよ。」

とザクロに釘を刺す。

『それでは両チームの先鋒、ジョー・ヒガシ選手、灰崎紅蓮選手、前へ』

「なんだア？どっかで見たことある顔だなあ…お前、俺と会ったことは？」

「知らない、記憶もない。一番古い記憶が白蘭さんのところに拾われた半年前だ。」

「記憶喪失かあ？そりゃまたかわいそうなことだ。まあ、試合じゃ手加減は無した。始めようぜー」

「いくぞー」

『試合開始iiiiiiii』

ジョーが駆け出し、体を沈め、拳を引く。

「ハリケーンアッパー！」

拳が突き上げられ、その軌跡の延長線上に竜巻が巻き起る。

ギリギリで体を晒してその竜巻を躲し、続いて後ろに回り込み、拳を振り下ろす。そこから続けての膝蹴り、アッパーと繋ぐ。

「グハッー（おかしい、これ、どこかで喰らったことがある…次に来るのは…多分…）」

飛び上がって逆落としての姿勢で踵を使い蹴り上げる。そこから踵

落としてリング外にたたき落とした。

『次鋒、アンディ選手！あがって下さい！』

「行くぞ！斬影拳！」

アンディが残像を残して突進して肘鉄を繰り出す。

「あまいね」

斬影拳の勢いを利用して紅蓮はアンディをリング外へ無造作に投げ飛ばした。誰も気付いてはいないが紅蓮の口調が一瞬変わっている。

『リーダー、テリー選手、あがって下さい！』

「OK！楽しもうぜ！」

「ええ…行きます…」

気迫を込めて紅蓮が走り、勢いと気迫を乗せた手刀を振るい、反対の腕もぐるりと回し、裏拳の姿勢に入る。とても半年前からの記憶しかないとは思えない程の格闘センスと場慣れ、疑問に思うテリーの横っ面に手刀が入り、続けて振り抜き様の裏拳がクリーンヒットする。

「グッ！POWER DUNK！」

ダメージを堪え、テリーは紅蓮にショルダータックルをぶちかまし、跳び上がる。そこからの打ち落とすような気を纏った拳。

テリーの十八番の一つ、パワーダンクだ。紅蓮に入ったダメージはさっきの手刀からの裏拳の比ではない。紅蓮の体は地面に叩き付けられ、更に跳ね上がる。ようやく受け身をとったがふらつく足もとは隠しようもない。

「どーします？白蘭様？手助けしますか？」

「いや、まだまだよ。見なよ、灰崎クンの右手。」

ザクロがストライカーとして飛び込むか白蘭に何うと白蘭は首を横に振り、紅蓮の右手を指さした。

「陽炎…？何故こんな至適温度で陽炎が…」

次鋒の桔梗が疑問の声を漏らすと同時に泡状の緑の炎が紅蓮の右手から吹き上がり、

「うおおおおおおあああああああああ
!!!!!!!」

紅蓮はその右手を円を描くように動かし、火球を放った。

「うおあッ！ POWER GAZER！」

テリーも地面を打ち叩き、気の柱を作って盾にする。

しかし、それで両方が消滅したときにはすでに紅蓮の表情が一変している。

人を食ったような笑みを浮かべてテリーの懐に飛び込み、連打。

「もっといい声出してよー！」

アッシュの連撃にテリーが大きく吹き飛ばされる、そこへ更に

「舞い上がれ！」

ジョーとの戦いで見せた逆落とし状態での蹴り上げを炎を付加して放つ。

そして一足早く着地して全身から炎を吹き出す。そして巻き上げたテリーに向けて突っ込み、すれ違い様に炎で焼いてリング外にはじき出す。

「ハア…ハア…ッ！どうなったんだ？」

紅蓮は豹変しての逆転劇について全く知らないように疑問符を浮かべた。

ともかくにもまずは一勝。隣のリングで行われていた極限流チーム対ボンゴレチームはボンゴレチームが先鋒の山本一人で全勝して駒を進めた。

『さて、では第三試合と第四試合を行います！日本チーム対炎の一匹狼チーム、アンチ斎祁チーム対K・チーム！始めて下さい！』

「まさかこのようなタイミングで貴様とぶつかるとはな…」

「ハッ！ザケンじゃねえ。俺はおめえとぶつかるのはもう「免だぜ。いい加減諦めろよ。」

日本チームの先鋒は京、相手は庵。非常に仲の悪い二人は試合開始直前まで言い争いをしていた。

しかし試合開始が告げられると表情が一変、両の拳に炎を纏い、撃ち合う。

拳と拳、蹴りと蹴り。シオルダータックルと頭突き、炎と炎。

紅蓮と紫の火の粉が周囲を明るく、凄惨に照らし出す。

何合拳を重ねたか分からぬ程の互角の戦い。二人の顔に小さな笑み浮かび、傷ついていく。

そして数分が過ぎた。未だ決定打は出ない。やがて庵の体がぐらついてくる。

「どうした？もう疲れたのか？まだまだだな」

「フンッ。貴様こそ足がふらついているぞ。」

二人とも体力の消費に体が追いついていない。しかしなおも拳を振るい、蹴りを出す。

「クッ！埒が明かん！八酒杯！」

動きを封じる火柱が京の体に迫るがそれを紙一重で躲し、胸倉を掴みあげる。

「遊びは終わりだア！」

そして爆発を起こし、右の拳を引く。そして勢いよく突き上げる。

「ぶっ飛ばしてやるア！」

思い切りのアッパーカットで爆発を引き起こし、続けて無式、天叢雲へと繋ぎ、庵をリング外に大きく吹き飛ばす。

「グッ…貴様ア…このままでは終わらんぞ！」

「ヘッ…テメエの生き甲斐を奪っちゃかわいそうだからな。むざむざと負けちゃあやれねえんだよ。」

「ストライカー三人で手出し無用だったからね。僕らの負け…かな。仕方ない。また今度噛み殺してあげるよ。」

雲雀の悪態に京は目を丸くする。

「へ？じゃあ二回戦はあいつとやり合っただけで勝ちなのかよ？」

『そう言うことですね。二人の試合の間にK・チームがアンチ斎祁チームを破って準決勝進出です。』

そして二回戦は終わり、インターバルとして一日の休養が与えられた。

インターミッション 異国で過ごす一日

では…やはり…？

ああ。俺達の今の役目は人のやり方を見守ること。場合によっては介入することも辞さない。

でも、どうするの？侵略者は。宇宙人が来たんでしょ？

ホントよね、無粋だわ。

案ずるな…

！

！

！

これはこれは。まさか直々にお出でになるとは。必要とあらば我も出る。異存ないな？

当然。

あるワケありませんよ。

ええ、ないですわ。

無論ですよ。

では、時が来るまで待つとしよう。

…

「へえ…じゃあ草薙さんの一族が三種の神器なんですか…なんか凄いですね…」

「一角っただけさ。それに俺はその運命はクソ喰らえ…って思ってるくらいだしな。」

ここはニューヨーク市街の一角。そのカフェテリアにはボンゴレチームと日本チームの面々がいた。

感心するツナに補足する京。

「むっ…よく分からんぞ…何故剣が人になるのだ…？」

「バカか芝生！草薙の剣っつてのは草薙の拳って書く！そう言っただよー！」

了平のピントのずれた台詞に食って掛かる獄寺。オイオイと慌てる紅丸に山本がいつものことと返す。

道を挟んだ向かい側ではミルフィオーレチームの面々が残してきた他のファミリーへの土産を主に紅蓮と桔梗主動で見ている。

その側ではマキシマとウィップがマキシマの握りつぶした物に替わる新しいコップを見ている。

K・とクーラがその近くを歩いて行く。普段のぶっきらぼうな印象を拭い去ったような笑顔を浮かべるK・。

そんな平和が崩されるとはその時誰も思っていなかった。

大会中断 アデス来る！

『さて、準決勝の前に大会主催者からの挨拶があります。どうぞ。』

普段のハイテンションな実況とは打って変わったアナウンス。リングに立つボンゴレチームとK・チーム、日本チームとミルフィオーレチームはきよとんとした顔で表彰台になるであろうステージを見る。だが、そこに現れた人物を見て京の顔が驚愕にゆがむ。

「テムエ…生きてやがったのかよ…ジヴァートマ！」

『ええ、おかげさまで…初めましてという人もいらっしやるかもしれないので自己紹介させて頂きましょう。』

ゴキブリを思わせる外見のジヴァートマが一礼する。

『この星の闇を統べる者、アデスの一人、クシエルを統べる闇の爪、ジヴァートマと見知りおき頂きましょう…』

.....

「大佐、これは…」

レオナがラルフに呼びかけた。

特設会場の奥深くに潜入したラルフ率いる怒チームの面々。彼らが見つけたのは機械人形、以前レオナやクラークがグランドモスクと呼ばれる場所に潜入した際に見た奈落の虫だ。

「クラーク、お前は どう見る？」

「今回も不穏な奴らが絡んでいたようですね。」

話し合いをする二人の内無線機を持っているクラークにレオナが進言する。

「中尉、リングにいるウィップに連絡すべきだと思います。」

「すまねえ、クラーク、無線機を渡せ。俺が連絡する。お前らは周囲の警戒を。おいムチ子！聞こえるか？」

.....

「大佐、ウィップと呼ぶように何度言えば分かるんですか？…え？奈落の虫？ええ…はい…こっちは今ジヴァートマと名乗るゴキブリみたいな男が現れました。草薙京が動揺しているのでおそらく以前対立したことがある者と思われます…はい…了解しました。回戦を繋ぎっぱなしにしておきます。」

情報が常に潜入したラルフたちに伝わるように回戦を繋いだままにしておくウィップ自身もジヴァートマの話に耳を傾ける。

「おい、キャバッローネの跳ね馬がいるぜ…ッッ!!!バカな！」

周囲をセンサーで探っていたマキシマが息を呑む。不審に思ったK・が「どうした？」と訊くと驚愕に震える声で

「イ…イグニス…間違いいねえ…右腕を失ってて右目も見えなくなってるよのだが間違いねえ…あいつはネスツのボス、イグニスだ…」

「イグニスだと…？生きてやがったのか…」

マキシマのセンサーはその会話の内にも虹の赤ん坊のコロネ口など、只者ではない人間を補足する。

ジヴァートマのご高説は未だ続いている…

…

動きますか…？

まだだ…まだ時ではない…

分かりました…他の三人にもそう伝えます。

…

「十代目…話が妙な方向に進んでいます…死ぬ気化の用意をしておいて下さい。」

「分かってる。それより客席にいる関連組織に連絡。並盛に手出しさせないようにして、そのついで他のチームの大切なところにも守りを置いて。」

「了解…」

ツナと獄寺の会話が終わると同時にジヴァートマが叫ぶ。

『というワケなので…あなたたち格闘家の肉体、差し出して頂く！』

その声と同時にラルフたちが会場の奥から飛び出してきた。

「この機械共が！大人しくブツ壊れる！」

ラルフが追ってきた機械人形にギャラクティカファントムを放つ。

クラークも得意の投げ技で機械同士をぶち当てる。レオナはハイデ

ルン譲りの真空波を生む手刀で機械人形の関節を切り飛ばす。

押し寄せる機械人形を前に会場にいた参加者たちが戦闘態勢に入る。

ツナはリングから小さなライオンを呼び出し、額に炎を灯す。

「ナッツ、形態変化！」

戦闘向きの形状のグローブにも炎を灯し、機械人形をまとめて薙ぎ払う。

「行くぜ、瓜！形態変化！CAIのシールドで侵攻を防ぎつつロケットボムで応戦する！」

耳に赤い炎を灯した子猫が獄寺の豹をあしらったバックルから飛び出し、獄寺に融合する。

そして彼は体に巻き付いた大量のダイナマイトを無造作に放る。

「ロケットボム・ver. X！果てやがれ！」

山本も二刀流になり、斬撃をはなち、了平は敵陣に飛び込んでめったやたらに頭部を砕く。K・はクーラを背後にかばいながら右手の炎で機械人形を殲滅し、クーラは栗色の髪を水色に染め、氷を飛ばしてK・を援護する。マキシマも腕からエネルギー弾を放ち、ウィップがデザートイーグルを乱射しながら鞭で周囲を薙ぎ払う。

客席に現れた機械人形はディーノたちが迎え撃っている。観戦中や有事のために、あるいは他の目的を持って客席にいた敗退チームの面々は市街地に出られる通路を封鎖するように動き、市街地へ機械人形が流出するのを防いでいる。

激闘は始まったばかりだ。

戦争その 失われた記憶

「でああっ！」

紅蓮は思い切り切り機械人形に拳を叩き付けた。しかし装甲の強度に負けて逆に紅蓮のほうが大ダメージをもらってしまっ。

「クソッ…もっと力があれば…」

必死で戦いながらそんな事を考える余り後ろのガードが甘くなる。そこへ機械人形が飛び込んできた。

「しまっ…！」

「烈火マグマ…！」

紅蓮に襲いかかる機械人形をザクロが赤い炎で焼き尽くす。

「しっかり周りに気い配れ！」

「済みません！よしっ！だったら！」

紅蓮がポケットから緑色の匣を出す。

「雷狐！」

左手にはめた指輪から電撃を放ち、それを匣に押しつける。そして匣から黒と赤の毛並みを持つ二匹の狐が現れた。

「行けッ！デュオー・シエン！」

二匹が回転してスパークを纏いながら周囲を飛び回り、紅蓮の拳に纏った電撃と共に周囲の敵を破壊する。

…

「あいつ…炎の出し方忘れてんじゃねえか？」

赤い悪目立ちするシャツを着たこついな青年、シエン・ウーは機械人形を2、3体まとめて殴り壊しながら隣で怨霊を地面から吹き出させるデュオロンに向かって言った。デュオロンも

「いや、炎の出し方はおるか自分のことまで忘れてる。生活しているく分には困らないだろうがアッシュとしての記憶を全て失っているらしい。まあ最も断片的にはあるが俺達三人を覚えていることだ

けは確かだ。あの狐のことをシエン、デュオと呼んでいたしエリザベートを見たときあいつは首をかしげた。」

そこに骸が衝撃に弾き飛ばされて飛んでくる。

「おやおや…モスカ以上のパワーと機動性、これはキツそうだ…所で、デュオロンと言いましたね?」

「ああ、何の用だ。」

「彼が力を使えない理由、調べてみましょうか?」

「できるのか!?!」

「ええ、ムクロウ、D・スペードの魔レンズを」

錫杖が三叉の槍に戻り、代わりに骸の目のすぐ前に変わった形状のモノクルが現れた。

「分析には少し時間がかかります。時間を。」

「おっしゃあああああああああ!!!!!!」

すぐさまシエンが骸に襲いかかる機械人形を粉々に粉碎する。

デュオロンも無言のまま怨霊を使って周囲を一掃する。

「(これは…記憶が何かしらの言葉で封印されている…? トリガーワードとでも言つべきだろうか…?) 何か鍵になるような言葉はありますか? 何者かに記憶が封印されているようだ。」

「いや…これと…って特に思い当たる節は…」

「蟹? ザツハトルテ? それとも技名のフランス革命歴? ああもうよく分からん! エリザベート!」

シエンが機械人形の頭部を潰しながら青い髪の女性に向かって吼える。

エリザベートが鞭で機械人形同士をぶつけて破壊しながらこちらを向く。

「さあ…心当たりといつても…全て覚えている分一つに絞りきれないわ…」

「だったら断片的に覚えている奴がいれば…デュオロン! 草薙をここに引っ張ってこい! あいつ確か断片的に覚えてたはずだ!」

.....

「あ？アッシュの記憶を戻すためのトリガーワード？さあな。なべて世は事も無しじゃねえの？これ以外断片的に覚えてたことないし。」

京が大蛇薙を撃ちながらエリザベートの問いに答える。

それを聞くと彼女は紅蓮の元へ走っていく。しかし機械人形が邪魔で先に進めない。と、そこにアルバが飛び込んでくる。

「行け！道は私たちが作る！霸王雷神拳！」

円の形をした巨大な気のかたまりがアルバの拳から発される。その気に触れた機械人形が破壊されていく。続けて風が躍り込み、両手を合わせる。

「喝！」

そして放たれた気合いが機械人形を吹き飛ばす。続いて拳崇とアテナが肩を並べて飛び込む。

「行くで、アテナ！」

「ええ、アッシュさんだけがアッシュさんのことを覚えてないなんて悲しすぎる！」

そして二人が同時に手を突き出す。

「ハアアアアアアアアア…超球弾やああああ！」

「サイコ…シューーーーーー！ト！」

そして二人の掌から紫色の巨大な光弾が放たれる。機械人形たちが薙ぎ払われ、一本道ができあがる。

「行ってくれ！アデスの思い通りにするわけにはいかん！」

「はいッ！ありがとうございます！」

そして駆け出すエリザベートを見送りながらアルバが振り返る。

「さて、チームメイトの御三方、やることは分かっていますね？」

「あつたり前や！一匹もおさへんで！」

「はいっ！」

「やれやれ、行きましょつか。」

そして彼ら四人の戦いが始まった。

.....

ディーノは一般客の退去が終わった会場の三つのゲート、そのうちの第二ゲートに陣取って機械人形と戦っていた。

「そろそろそろあー！」

橙色の炎を纏った鞭がしなり、機械人形を次々に破壊していく。後ろには影のように付き従う忠臣、渋い40代の男、ロマーリオがいて、拳銃で機械人形のセンサーを撃ち抜いていく。

「こいつら数だけだぜ！」

「ああ、援護射撃、頼むぜロマーリオ！」

「了解だ！」

「光速天翔!!!」

凄まじい勢いで鞭が振るわれてたちまちのうちに目の前から機械人形がいなくなる。そしてしばらくしても出てくる気配はなかった。

「終わった…のか？」

「の、ようだな。」

.....

ゲートから機械人形がいなくなったのは全滅したからではない。会場の方に回ったからだ。

つまりどういう事か。分かり易く言うと京たちのほうに機械人形が流れ込んできたと言っことだ。

そのたぐさんの敵の中でエリザベートが乗馬用の鞭を振り、叫ぶ。

「舞い上がれ！大いなる光と共に！」

そして全身から放たれた光が周囲の機械人形を消し飛ばす。

「ッ！あなたは…エリザベート・ブランドルシュさん…でしたよね？何の用ですか？見ての通り僕も忙しいんです。」

「あなたの記憶を戻します。」

「えッ!？」

「あなたの記憶を封印しているのはある言葉。」

「その言葉に心当たりがある？」

「ええ…おそらくは…では、いきまます。なべて世は事も無し」

「ッッッあっ!!あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああ
」

いきなり脳の中でふくれあがった情報。それに耐えきれずに紅蓮は叫んだ。

.....

…だ…ッシュ…俺には…が…わかつ…

アンタ、さつき……ボクのごときは「全部わかってる」……確かそう
言ったよネ。

バツカじゃないの？わかってないヨ。ボクは、この世界のことを…
けっこう、気に入ってるんだ。

自分の声だけが聞こえる。やがて真っ白な空間が目映った。
そこに様々な映像が投影される。八神庵の体から勾玉のようなモ
ノを取り出す自分、白い自分そっくりの男から黒い炎を取り出す。

白い服の女性の体から鏡のようなモノを取り出して体に取り込む
自分、そして…自分の内面で対面した白い髪の自分とそっくりの男…

そして巨大な扉。潜らずに消えていく自分。

それらの記憶はやがて一つの記憶にたどり着く。

『テムエは…神楽の力を奪ってったソバカス野郎!』

『あれ?ひょっとしてボクの名前、覚えてくれてないの?ボクはアッ
シュ。アッシュ・クリムゾンだよ。』

そつだ…僕は…ボクの本当の名は…

.....

「あぶねえー」

「行きましたよお嬢さん」

頭を抱えて苦しむ紅蓮に気をとられたエリザベートに背後から機

械人形が迫っていた。

「ッ…間に合わない…」

振り向いたときには既にエリザベートの眼前に機械人形が迫り、攻撃態勢をとっていた。

「shhhhhhhhhhaaa
aa
aaaaaaaaaa」

訳のわからない奇声を発しながら襲いかかる機械人形。

しかしそれをエリザベートの顔の横から出てきた手が受け止める。続けて機械人形の手を握り、指輪からの電撃と緑の泡状の炎で本体ごと粉碎する。

「…え…？」

驚いて振り返ったエリザベートのすぐ側で紅蓮はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「フツ…心配かけたね…さあ、押し切るよ！何も敵は無限にいるわけじゃないんだ。」

そう言って桔梗を見る紅蓮の表情は紅蓮のそれとは全く違う。

「外付け修羅開匣…頼むよ桔梗サン！」

「ええ、分かっていますよ！外付け修羅開匣！暴れる、雲スピノサウルス！」

桔梗の体に入れ墨のようなモノや小さな棘が現れ、足下からスピノサウルスの頭だけが現れ、機械人形を喰らう。

「やるね…やっぱり白蘭サンの右腕だけのことはあるネ…」

「ありがとうございませす…さてあなたの本名、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「うん、でもちよっと待ってね？そっ！」

そう言って紅蓮は腕を振り、機械人形を二体程まとめて燃やした。「ボクはアッシュ、アッシュ・クリムゾンだよ。改めてヨロシクネ。」そしてアッシュは炎を用いた高火力の、しかしどこか軽やかなスタイルで機械人形を狩っていた。

しばらくそれを続けていたが、急にアッシュがエリザベートを見や

り、言った。

「ベティ、ボクと一緒に来て。桔梗サン、白蘭サンに伝えてよ。入場口に何とかして集まれ…ってサ。ボクらは伝えて回ってくるから。」

……

「それで…？一応一方向からの襲撃だから迎撃もしやすくなったけど、結局数はちっともへらねえ…」

京が愚痴ると息を切らせたアッシュがやってきていった。

「ハアツハアツ…フウ…それじゃあお集まりの皆さん！殲滅力の高い技で一気にフツ飛ばしちゃってください！数は増えないと思うんで！」

「テメエの考えに乗るのは癪だが、ま、しゃーなーな。紅丸！テリー！
ジョー！」

「やれやれ、ま、やるしかないか。」

「OK！」

「おっっしゃあアアアア!!!!やってやるぜえエエ！」

そして京が腕を引き、紅丸が手を天にかざす。テリーも両手を組んで振り上げ、ジョーが右腕をぐるぐる回す。

「遊びは終わりだ！」

「雷皇…」

「トリニティ…」

「行くぜ…」

そして一斉に大技が放たれる。京が引いていた腕を無造作に振り、天叢雲を放つ。

「俺からは逃げられねえんだよ！」

そして同時に紅丸が拳を突き出し、大出力の電撃を放つ。

「拳！」

「ゲイザー!!」

「吹っ飛べエエエエエエ!!!!」

テリーも両手を地面に叩き付け、気の柱を噴出させる。同時に

ジヨーが渾身のコークスクリューを放ち、竜巻を放つ。

「これだけで機械人形の三分の一が消し飛んだ。次に進み出たのは他の皆と同じく試合を観戦していた極限流の三人と拳崇だ。」

「ロバート、ユリ、分かっているな？」

「あつたりまえやで！」

「多勢に無勢じゃ霸王翔吼拳を使わざるをえない！でしょ？」

「ワイの超球弾も負けとらんでえ！」

そしてリヨウ、ロバート、ユリの三人が両手を体の脇で構え、拳崇も両手を体の前で気を練るような構えをとる。

「霸王！翔・吼・拳！！！！」

「超能力と龍の気の「ロボレーション」！ほあああああ……どないや！！！！」

四つの凄まじい光弾が機械人形を最初の三分の一にまで減らしていく。

「さて、準備はいいかい？綱吉くん？」

「ああ、いくぞ。オペレーションXX」

ツナが両手をクロスさせてXX BURNERの発射態勢をとる。

白蘭も右手をかざし、力をためていく。

「全滅させるよ。白貫手」

「XX BURNER！」

ツナの両手から巨大な炎が放たれ、白蘭の右手から高密度の白いエネルギーが迸る。

瞬く間に機械人形が消えていく。

そのエネルギーの残滓が消え去った後残っていたのは会場の構造体のみだった。

「皆さんやりますね。まさかあの数を全滅させるとは。いや、お見事お見事。我々が動くだけの価値はありますね。」

どうやって生き延びたのかジヴァートマが現れて賞賛する。その後ろに控えている人物を見てアルバの目の色が変わった。

「……ッソワレ……!?!」

しかしソワレの方は沈鬱そうな顔をして押し黙ったままだ。

「それは少し違うんじゃないのかな？ 彼の名はユーダイム。それ以外の何者でもないのだよ。」

心外そうにそう言ったのはジヴァートマの方だ。

「こちらからはただ戦わせるために操り人形にしたとしか見えないのだがな。それもかなり不完全なね。」

心理コントロールがうまくいっていないのではないか？」

アルバの皮肉にも冷静にジヴァートマは返す。

「ああ、全く持ってその通りだよ、ユーダイム。そこにいるアッシュ・クリムゾンの血液から創り出したクローンも心理コントロールのせいで炎が使えなくなったものだから記憶を消去してから捨てたのだがね。」

そこまで言ったところで顔を憎々しげに歪めて毒づく。

「クソッ。…我らに対する抑止力とするためか…だがまあいい。こちらにはまだ隠し球がある。後日、また会おう。」

そういつてジヴァートマは消えていった。

戦争その　ボンゴレ&ハイデルン傭兵部隊VS アデス&NESTS

へえ…と京が感嘆の声を漏らした。

並盛町の廃工場から地下に潜ったところにあるボンゴレファミリーの地下アジト。

KOF参加者たちが別々に狙われる可能性を危惧したツナがアジトに参加者たちをアジトに招いたのだ。

「こんな立派なアジトを持つてるなんてな…お前一体何者なんだ？」

「ただの自警団のボスですよ。」

京の感嘆の声に続いてリョウウが発した問いにツナが答えた。

それを同道していたラルフが遮って言う。

「へッ。よく言っぜ。マフィアのボスだろうが。」

「違いますよ。もともと自警団だったわけだし、マフィアになってから増えた外道も大半が首や肅正を終てあります。だからこそ晴れて自警団を名乗れるんですよ。」

いまだ憚然としたラルフをなだめるようにクラークがツナに向けて言う。

「OK、とりあえず信用しよう。教官も門外顧問機関の世話になってるらしいしな。邪険にはできんさ。言葉の真偽はやり方を見て判断させてもらおうか。」

今度はそれに獄寺が

「ああ、後で疑ったことを後悔させてやるよ。」
と返した。

.....

「…それで…？」

白銀の髪を持った青年がロングコートの裾を揺らしてK・に続きを促した。

「とぼけんじゃねエよ。テメエらも俺らと同じなんだろつが。」

「そうだ。オロチ因子の実験体。型式番号O 005、名はゾディアック・ロランジュだ。」

「へッ。うらやましいモンだな。テメエにはちゃんとした名前がある。その女もそうだろう？」

そう言っつて視線を向けた先にはクーラと話し込むゾディアックと同じ髪の色的女性がいる。

「ああ、一応血縁的には俺の姉…ということになるんだろつな。アネル・ロランジュだ。」

「で…そのお前らがなんでここに？」

「今は別室にいるが、後二人の同類とアデスに狙われてな。四人揃って匿われている状態だが…そろそろ反撃に転じるべきかもしれんな。」

「ハッ…こっちから攻めなくても向こうから来てくれるさ。焦るだけ無駄だ。」

「どうした？」

「ガラじゃねえな、ベラベラ喋るなんぞ…」

「俺もだ…」

.....

腰背部から山本が拳銃を抜いて二丁拳銃で放つ。

いくつかの的が同時にはじけ、吹き飛んだ。

アジトの訓練室でその光景を見ているロックは驚きのあまり目を丸くしている。

「お前…剣だけじゃないんだな…」

そう言っつロックの横には六尺棒、ライフル、マシンガン、果ては木の枝や小石まで、あらゆる武器が山積みされている。

格闘戦用の武器や飛び道具、あらゆる戦局に対応できうるそれらは全て偶然通路で出会ったロックに山本が頼んで二人がかりで運んできたものだ。

「いつも携行するわけにはいかねえからなあ、ま、いわゆる保険って奴っすよ。」

「へえ…じゃあ素手でもやり合えるように、スパーリングでもするか？」

「面白そうっすね。」

ロックは普段の構え、古武術とマーシャルアーツを融合させた構えをとる。

対する山本はぎこちなさそうに構える。

「オイオイ、何も無理に構える必要はないさ。自然体が一番ならそれはそれでいい。」

「ハイ…」

先手をうつたのは山本だ。

素早く懐に入り込み、突きを出す。

「セヤッ！」

ロックはそれを真空投げの動きで受け止め、踵を叩き付ける。ロックオリジナルの古武術とマーシャルアーツを組み合わせた必殺技、クラックカウターだ、そのまま怯む山本のボディに鋭い突き、そして「ぐうッ！」

「よく見てもものにしろ！レイジンググーストーーームッ!!!」

両腕を一度突き上げ、振り下ろす。そして周囲に発生した気の竜巻が山本を弾き飛ばした。

.....

「隼人、武がどこに行ったか知らない？」

「さあ、訓練室で武器の練習でもしてるんじゃないっすか？」

「じゃあいつてみようか。」

「はい。」

そんな会話をしながらツナと獄寺が通路を歩いていると向こうからテリーがやってきて二人に質問してきた。

「なあサワダに「ククデラ、お前ら、ロック見なかったか？」

•
•
•
•

束の間の休息…その休息もやがて崩れ去る…

戦争開始まで…

あと一週間…

番外編、父を探して日本 イタリア 日本

イタリアのとある下町、その安い酒場にまったく持って不釣り合いな女性が入ってくる。

髪の色は黒、どうやら日本人のようだが服装が異常だ。

なぜなら試合中でもないのに道着に額当てという出で立ちなのだ。

彼女の名は藤堂香澄。藤堂流古武術の使い手である藤堂竜白を父に持ち、自信もまた藤堂竜の使い手である。

あるのだが…この竜白、物凄く頻繁に失踪する。NEOGEO会議室に娘共々親子会議と称して参加したのはいいがその後第二弾において失踪したのか竜白のみ不参加。それはもう凄まじい頻度で失踪するのだ。

おそらくまたもや失踪したのであろう。店の周辺には柄の悪い連中がたむろしているにもかかわらず堂々と店に入っていくと

「この近くで道着を着た日本人男性を見なかったか!？」

と、イタリア人に日本語で、それも大声で聞いた。

当然、彼らにとっては騒音に過ぎず、文句を言っが当然これも通じてない。

当然ここにいる連中は血の気が多い物ばかりであり、乱闘騒ぎになるのも当然の成り行きなワケで

「な、何だ!? やるといふなら相手になるぞー!」

たちまち一対十数人の大乱闘に発展した。

それを店外から見ている青年がいた。

髪の色は金、青い瞳で店内を覗き込む彼に気付かずに香澄は「重ね当て! 超重ね当て!」と、乱闘のど真ん中で暴れ回る。

と、一度張り倒された男が拳銃を抜いた。香澄がそれに気付かないうちに男の指が引き金に乗る。

そして引き金を引こうとした瞬間、青年が動いた。店のガラスをたたき割り、店内に躍り込むと拳銃を弾き飛ばす。

「大丈夫ですか?」

そんなこんなでうつろうつろしていると例の青年を見つけた。

「ああああああ！あなたは！」

「なぜここにあなたが！」

バジルの隣にいるツナの不審がる視線にも気付かずバジルに駆け寄った香澄は手を握ってぶんぶん振り回した。

「うわわわわわ!!!おっ、落ちっ、落ち着いて下さいっ！痛い痛い痛い」

「す…済みません…嬉しかったのでつい…」

「嬉しかった？どついつ事ですか？」

「あるとき助けて頂いたお礼がしたいと追いかけてきました！もう一つ言わせてもらえば、私はあなたに惚れてしまった模様です！」

「はっ、はあ!!？」

思わずガクッとずっこけるツナと赤面してびっくりするバジルの声がシンクロした。

ツナが（なんかややこしいことになりそーだなあ）と立ち去っていく。その後ろでは顔を真っ赤にしてバジルが

「いやいやいやいや！無理無理無理無理！拙者はまだまだ未熟者ですからーやめて！痛い痛い痛い痛い！」

と騒いでいた。しかしその様子は満更でもなさそうだった。

戦争その 開戦！アデスクローン隊来る！

「この町に…ギース様が…一体何でだ…？」

思案顔で素肌に禁煙マークのジャケットを羽織った青年がその服装に似合わない煙草を吹かした。

そしてすぐ傍にある三節棍をひつつかむと煙草を吐き捨てる。

「だが…偽モンだったら容赦ねえぞ…狂犬の牙…喉笛に食い込ませてやる…」

青年…かつてサウスタウンを支配していたギース・ハワード。その右腕であり、狂犬として恐れられたビリー・カーンは煙草の火を踏み消すとその場から立ち去った。

…

「あ、携帯が鳴ってる、草薙さん、ちょっと行ってきます。」

真吾がポケットで鳴っている携帯を取りだしてそそくさと立ち上がった。

「おっ。」

短く答える京の言葉を背中に部屋から出て、通話ボタンを押す。

「はい、もしもしっ。」

『真吾君』

通話口から聞こえてきた声は心配そうに揺れる少女の声だ。

「京子ちゃん、どうしたの一体？」

『中継でKOFを見てたら大変な事になってて、それで大丈夫かなって思っ…それに何か怪しい人がうちの近くをうろついているし…すごく不安で…』

「きつとすぐに終わるから大丈夫だよ、うん、すぐ終わるよ、終わらせる。俺も終わらせるためにがんばるからね…」

『やっぱりそうなる…それが不安だったのに…バカ…』

さすがのお気楽極楽馬鹿野郎の真吾も沈痛な表情になり、すぐに表

情を引き締め、努めて明るい声を出す。

「だーいじょぶだーいじょぶ、絶対に大丈夫だよ！絶対に無事に帰るからー心配しないで待っててよー！」

『そのところ…ユキさんから聞いた京さんと一緒だね。』

「へ？そう？」

『じゃあ、約束だよ。絶対帰ってきてね。』

「うん…大丈夫、約束するよ。」

電話を切って振り向くと真吾の後ろで京がニヤニヤしていた。その隣にはいつの間に来たのかツナと獄寺もいる。

「いやー、あのコスプレ娘とお前がねえ…」

ニヤニヤ笑いを貼り付けた京が言いながら顔で本音を隠しつつ続けた。

「是が非でも死ねねエなあこれじゃ、ま、ゴキブリはちつとやそつとじゃ死なねえからなア、大丈夫だろ。」

直訳するとお前は自分の弟子だ、だから絶対に死なない、約束は必ず守れ。と言うことだ。

「ええ、ゴキブリを遙かに超えた生命力、見せてあげますよ！」
真吾も不敵に笑って見せた。

ツナと獄寺も

「そうですね、恋人を守りたいなら命がけでも生き延びないと。」

「ですね、そこん所は正しい右腕の生き様と一緒にですね。」
と言った。そこに京は言葉をかけた。

「お前らも会ってこなくていいのかよ？」

「そうですね、二人とも彼女はこの町にいるんですよ？」
それにツナが悪戯っぽい顔できく。

「会わなかったと思います？」

「あっ！テメエら、ひよつとして！」

「もうあってきたよ、心配はかけたくはねえからな。」

守るべき者を持つ男達は誰からともなく視線を交わし、

「ぜってえ生き残って帰ろっぜ。」

「ええ、悲しませたくありませんから。」

「真吾さんに同じ。俺は彼女を残しては死んでも死にきれません。」

「俺も同じッす、十代目とあいつより先には死にませんよ！」

と、決意を新たにした。

.....

そして次の日、アジトにいる面々がブリーフィングルームに集まる
と、ジャンニーニが口を開いた。

「皆さん、よく聴いて下さい、この地点に巨大な炎反応が現れました。」

「ここが敵本隊ってこと？」

「とはかぎらねえな。」

「陽動か、派兵された部隊か……」

ツナ、ラルフ、クラークの順に呟くとそれに京、テリー、リョウが
答える。

「ハッ！相手の出方？知ったこつちやないね！」

「来るやつ来るやつみんな倒せばOK！そういうことじゃねエか？」

「応、俺も同じだ。襲いかかる敵は全て倒せばいい！」

そこへロックが割り込む。

「何にせよ、現場じゃ臨機応変に対応するしかない。俺はそう思うん
だけどな。みんな強いんだし、少数精鋭で広く布陣すりゃいいんじゃない
ねえか？」

白蘭もそれに頷き、

「ボクもそう思うな 結局それが一番確実だと思うよ。もちろんアジ
トに守りをおくのも忘れちゃ駄目だよ」

.....

「つい事でクーラ、お前は基地の中で守っててくれ。」

K・Kが言つとクーラは案の定怒った。

「なんでよ！なんで私はお留守番なのよ！」

「危険だからだ。」

「べもなくK・が言い放つとクーラは更にダダをこねた。

「なんで？なんでよ！なんでお留守番なの？！ヤダヤダ！」

「落ち着いて聴け。本当はこんなタイミングで言いたかねえんだがな。」

K・がクーラの目をジッと見つめて言う。

「俺はお前が好きなんだよ。だからお前には危険な目にあってほしくねえ。」

K・はその時の驚きに満ちたクーラの顔を見つめる。

赤い瞳に涙が輝いて綺麗だ。と思った、それを守りたいとも。

「分かったな？心配はいらねえ、ぜってえに帰ってくるから、お前は侵入された時のために待機してろ。」

そう言っつて部屋を出て、アジトの外へ出るためのゲートに向かっつ。その背中をクーラは生涯忘れないだろう。その時のK・はそれまでで一番格好良かったからだ。

.....

「香澄殿、拙者は絶対に帰ってきます。絶対に待っていて下さい。」

「はい...」

そしてゲートに向かおうとするバジルはふと思いついたように言う。

「帰ってきたら二人であなたの好きなナポリタンを食べに行きましょう。約束ですよ。」

「これでバジル殿は死ねませんね。」

「その為に言っただんですよ。」

.....

そしてアジトの外に布陣した彼等の前に現れたのは...

無数の京とギース。

アデスが作り出したクローン達だった。

戦争その3 狂犬と宵闇のアンジユ来る！

「Are you OK!」

テリーが叫び声を上げてギースのクローンの一体の上半身に拳を
めり込ませた。

「BUSTERWOLF!」

続いてめり込んだ拳から気を爆発させる。現在のテリーの1on
1最強技、バスターウルフ。

それがギースの上半身を吹き飛ばす。後ろから飛びかかるギース
達も振り返り様にライジンググタツクルで蹴散らし、そこへきりもみ回
転しながらの飛び込み蹴り、超烈破弾でアンデイが飛び込み、巻き上
げられたギース達を行動不能まで追い込んでいく。

「やはりコイツら意識がない!」

「ha! 大方あのロボット共と一緒になんだろうぜ! ジョー! 任せませ
! OK?」

言いながらテリーが首根っこをひつつかまえたギースをジョーに
向かって放る。それを待ち構えたジョーは大きく屈み込んでパワー
を溜め、

「タイガーキック!」

跳躍しての膝蹴りを繰り出す。

勇躍するサウスタウンの狼達ではあるが如何せん敵の数が多い。

暫くの後数に任せた猛攻に圧され始めた。

アンデイは小柄故に一撃に重さが足りず、ジョーも竜巻の軌道を読
まれ始めている。

テリーも拳を満足に引き絞ることができないでいる。

彼等の苦境は始まったばかりなのだ。

.....

「サイコボール!」

「超球弾やアー！」

アテナと拳崇が同時にはなった光弾がクローン京たちを吹き飛ばした。そこへアルバも

「行けー！」

と気功波を飛ばして追撃する。

「アテナー！なんやったらお前も中で隠れとってええねんで！」

クローン京の顎をカチ上げながら拳崇が忠告するとアテナはムキになったように

「そう言いつ拳崇だって隠れてていいのよー！」

と言り返す。どうも退かせることが無理だと思った拳崇は苦笑未満の表情を浮かべて倒立、回転しながら飛び上がったクローン京たちをまとめて巻き上げた。

「しゃーないなあ…ほな、わいの近くから離れるんや無いで！ちよつと離れたら守りきれるかどうか分からんさかいなあー！」

叫びつつも精神が高揚しているのか口の端が上がっている。思いつ人であるアテナを守る上にこの様な面白い戦い。

口元がほんの少しだけ笑んでいるのは彼の格闘家の部分がこの戦いを楽しんでいるからだろう。

「開門雷神拳ー！」

アルバの十八番がクローン京をまとめて吹き飛ばし、三人が固まる。

「アテナ、頼むでー！」

「うんっ！シャイニングクリスタルビットー！」

アテナの髪飾りからいくつかの部品が分離し、周囲を飛び回って彼等の身を守る。その中からの超球弾。

完璧なコンビネーションでクローン京を薙ぎ払っていく。と。アルバが何かを感じた。

「来るー！」

焦ったように飛び回るビットの外に飛び出して両腕をクロスさせるとそこに革製のブーツが叩き込まれた。

ガードの上から吹き飛ばされたアルバが着地して蹴りを放った闘

入者を見据える。

「来ると思っていたよ、ソワレ。」

青いデニムジャケットを素肌の上に羽織った双子の弟が一言も言わずに双子の兄に襲い掛かる。

兄が赤いジャケットの裾を翻して蹴りを受け止め、流麗な動きで弟に拳を繰り出す。

右頬をとらえた一撃でほんの少し後ろに下がった弟が兄とにらみ合う。

「ちて、と…どつちって目を覚ましてるか…」

「……」

「一度倒すしか、なさそうだ、済まない。手加減は……」

「……」

「してやれそうもない。行くぞっ！」

「……」

同時に踏み出した赤と青の兄弟の影がぶつかり合った。

……

テリーは何匹目か分からない苦虫を噛み潰していた。

「ハアツハアツ…くっ…POWERSTREAM！」

地面に拳を叩き付けて周囲を取り巻くギース達を吹き飛ばしたがエネルギーの余波でおぼつかない足取りのアンディとジョーも体勢を崩してしまった。

「うっ…斬影…ガハッ！」

「スクリユーアッパー！ゴフッ！」

斬影拳を出そうとして烈風拳を喰らい崩れ落ちるアンディとビクトリーアッパーを繰り出した姿勢からそのまま倒れ込むジョー。

「しまっ…くそっ！ROUND WAVE！」

周囲に気の壁を張ったがそれすら弾幕になり得ず、真空投げを喰らってしまう。その先で別のギースが待ち構え、羅生門の構えを取っている。

(くそっ！…！)までか…！?)

しかしその時

「おらああああああああああああっ！」
横合いから飛んできた赤い衝撃が構えたギースを吹き飛ばした。

「…ッ！」

一拍遅れて地面に叩き付けられたテリーにその影が言葉をかけた。
「らしくねえじゃねエかよ、サウスタウンヒーローさんよオ。」

「なっ…!?お前…」

「あんなまがいモンに手こずるたあな。おい、ギース様を冒涇したあいつらを倒すんだろ？手工賃してやっから早く立てよ。」

「ビリー…」

ギースの右腕と謳われた狂犬、ビリー・カーンはそう言つとあまりにも無造作に2・3体まとめてギースのクローンを腰の高さで寸断した。

「言つとくがテメエを助けるんじゃないやねえ。奴らを倒すのに手を貸すだけだ。」

「だろうな。後ろだぜ。」

「知ってるぜ。」

いいながらビリーが三節棍を持つ手首を返して三節棍を回転させ、ギースの顎を力チ上げた。

その間にテリーも立ち上がる。ライバルの登場に気分が高揚したのだろうか。底をついていた気力が身体に充満している。

「さあ、さっさと済ませようじゃねエか、サウスタウンの餓狼さんよオ」
「！」

「おつや！GETSERIOUS！ド派手に行こうぜ狂犬！」

一匹の獣が大量のギースに飛び込んでいった。

……

ゴツと言つ鈍い音と共にアルバの拳とソワレの蹴りがぶつかり合う。

一進一退の攻防にアテナの気が行っているうちにクローン京が大蛇薙の構えで飛びかかり、炎を手に溜めた。

「えっ……ッ……」

「アカン！」

咄嗟に拳崇が間に割って入って両腕をクロスさせてガードの構えを取る。

「……………」

そしてクローン京の大蛇薙が放たれた。

「ぐおっ……」

拳崇の両手に炎が襲い掛かり、小さくないダメージを負わせる。しかしそれにかかずらうこともなく拳崇が両手を突き出して吠える。

「負けるかい！超球弾やア！」

全力の超球弾がクローン京を跡形もなく消し飛ばした。

「拳崇……」

アテナが心配して駆け寄る。もうクローン京は掃除し終えたようでした。そこで戦っているのはアルバとソワレだけになっていた。

「バカ！なんでこんなムチャしたのよ……」

「ハア……」

拳崇がため息をつきながらまっすぐアテナを見つめて言う。

「お前のことが好きだからにきまっとするやる。」

「え……?!」

「嫌か？」

少し残念そうに発された拳崇の問いかけにアテナが赤面しながら答える。

「うっん……ちょっとびっくりしたけどむしろ嬉しい……」

「さよか。そら良かった。さあ！アルバさん達の方をしっかりと見とかんとな……」

「うん。」

その視線の先でソワレが地面に両手をついて回転脚を放つ。ソワレの必殺技、ダブルウェンズデーだ。

凄まじい勢いで襲い掛かる右の蹴りをアルバが受け止める。続い

てそのまま身を沈め左の蹴りを躲す。

そこから更に一発のジャブ。

「ッー！」

続けて思い切り蹴り上げてソワレの身体を宙に浮かせ、自身も飛び上がる。

左右のラッシュ。

「オラオラオラオラオラア！幻影雷神ッ！」

続いて右拳をしっかりと引き絞り、電流が走るような衝撃を伴った鉄拳をソワレの顔面に叩き込んだ。

「流星拳ッー！」

思い切りソワレの身体が地面に叩き付けられる。

「ウガッ！ってえ〜！やり過ぎだぜ兄貴ー！」

ソワレがアルバに向けて随分とフレンドリーな様子で悪態をつく。電流にも似た衝撃がソワレを縛る心理コントロールを破壊したのだ。

「言ったらう。手加減はしてやれんど。」

「言っただけどさあ…ま、いっかー！」

……

「GOTOHELL!!!!」

ビリーがコンバーター三節棍から炎を吹き出させて頭上で回転させる。

続いて火柱を立てる。必殺のサラマンダーストリームが決まり、ギースが燃え尽きた。

テリーも拳を天にかざし、最初の正拳をショートカットして拳を突き出し、バスターウルフを放ってギースを塵にした。

「フウ…これで終わりか？」

「らしいじゃねエか。ケッー！こんなよええんじゃホントに冒険だぜ。」

二人の後ろから一体ずつギースが飛びかかるが一向に動じない。

「へッー！テメエらなんぞに手こずってぢやなあ…」

「こんな悲しい生…」

ビリーが無造作に三節棍を回転させ、事も無げにギースを真つ二つにした。

「あの世で本物のギース様に合わせる顔がねえんだよ！」

テリーも振り返ると同時に腹に肘打ちをねじり込み、シヨルダータックル、アッパーカットとつないで飛び上がる。

「許しておけねえんだよ…」

叫んで着地と同時にパワーゲイザーに繋いで見せた。綺麗にハイアングルゲイザーで決めたテリーはビリーに向き直ると

「さて、どうする？やるかい？」

「ああ、やるか！」

そしてライバル同士がサシでぶつかり合う。

「兄さん…」

「あのバカが…」

苦笑しながら汗を光らせて戦う二人を見ているアンディとジヨはやっと終わったと思った。

.....

「さてと…ネームレス、これで終わりか？」

「待て、K、こいつで最後だ。絶影。闇に散れ。」

白い制御用グローブから居合いのように左手を抜いて赤黒い炎を刀のように振るう。納刀するときには最後のクローン京が斬り捨てられた。

マキシマもゾディアックも自分に向かって来るクローン京を薙ぎ払った。

最後にクリザリッドのテュホンレイジがクローン京を倒すと襲い掛かるものがいなくなった。

その時、隻腕の男が歩いてきた。傷跡の残る左目を閉じたままに右目に憎悪をこめて歩いて来るその男の名を、K、が呼ぶ。

「テメエ…イグニス…！」

戦争その 光へと歩む影

「ぐおおッー！」

「マキシマー！」

マキシマーの両腕が斬り落とされる。80%を機械化しているため出血はないが代わりにオイルが噴出し、断面にスパークが散っている。

「大丈夫だ！来るぞ！」

「墜ちよ……！」

イグニスの手から光弾が放たれ、ゾディアックに襲い掛かる。

「くお……ッー！」

間一髪炎でガードしたが衝撃までは殺しきれずに後ろによるめく。

そこに襲い掛かるイグニスのカッタースカートにK・が炎をシュート。ゾディアックをカバーする。

「ち。その失敗した力もろともに消し去ってやろうと思ったのだが。」
言いながらもイグニスは光弾とカッタースカート、そして目にも留まらぬ高速の蹴りを駆使して四人に襲い掛かる。

紙一重の所で躲し、いなすK・達だがレベルの一段階低いクリザリッドが躲しきれず、その腹にイグニスの爪先が突き刺さる。

「くっ……は……ッ！くそっ！ゼロ様とグルガンの仇！」

「我の手駒をどう使おうと勝手だろう？」

「貴様ア！エンド・オブ・エデン！」

クリザリッド最大の奥義にも平然と手をかざし、衝撃にほんの少し顔をしかめつつも受け止めてみせる。

「なッ!？」

「舞い降りよ……！」

かざした右手をそのまま振り下ろし、光の柱を立てる。それを出始めから完全に貫ったクリザリッドの身体が宙を舞った。

「かは……ッー！」

「貴様あー！」

「よくも！」

吹き飛んだクリザリッドを冷淡に一瞥するとグローブをハンマーに変形させて飛びかかるネームレスと地を這うような姿勢で襲い掛かるゾディアックの同時攻撃をカッタースカートで受け止め、右腕を折って追撃に備える。

「シャリアアアッ！」

そのガードめがけて時間差でK・がショートステップからの鋭い跳び蹴り、ナロウスパイクを放ち、受け止められた瞬間回し蹴りのように足を振り、瞬間生成した火球をイグニス胸に蹴り込む。

完全なる二段構え、ナロウスパイクからのエアートリガー。しかしそれをまともに食らってもなおイグニスの余裕は揺るがない。

「モルモット風情が…貴様らに平穩など与えられると思っているのか？ 貴様らに生きる権利があるとしても？ ツァー！」

冷徹な言葉を吐いた次の瞬間、体中から気合いを迸らせ、三人を大きく吹き飛ばした。

「グハッ！」

「があああああ！」

「ツツツツツ」

K・はまともに地面に叩き付けられ、ネームレスは木に右肩を叩き付け、ゾディアックは頭から地面にダイヴさせられた。

「フン、モルモット風情が創造主に逆らうからそうなるのだ。」
うめきながらも立ち上がるK・。しかしその足下はふらついている。

片膝をついたネームレスは右肩を押さえている。出血はないが骨が折れたようだ。

ゾディアックも上体までは起こせたが苦痛にあえいでいる。

マキシマは両腕が無く、ミサイルもイグニスが出てくる前に使い切っており、胴体のマキシマビームも両腕がないので砲口が展開できない。

クリザリッドにも意識はない。

彼等はこの上無い窮地に立たされていた。

.....

森の外れ、街と森との境界線で黒曜チームとアンチ斎祁チーム、そしてアツシユというメンツがクローン達と戦いを繰り広げていた。

「来ますね、フラン、一人で隠して下さい。来ますね？」

「出来るものにもやるしかないじゃないですか。」

骸とフランは戦いには参加せずに戦いを外から視認されないよう、また、街に混乱を起こさぬように幻覚による結果をつくっている。

その骸の正面から拳が叩き付けられた。軽やかにその正拳突きを躲した骸がその拳の持ち主、浅黒い肌を持つアデスの幹部、デュークに向けて言葉を発した。

「おやおや、あなたが隊長ですか？随分と品のない。」

「品がないのは認めるが俺は隊長なんて三下じゃない。幹部だぞ？貴様に勝ち目があるとはとうてい思えんが？」

「クフフフフ、これはこれは。随分と見くびられたものですね。いいでしょう、サシの勝負です、あなたの先ほどの言葉とプライド、ズタにしてあげましょう。」

「貴様こそ吠え面をかいても知らんぞ？」

言うが早いか二人は同時に駆け出し、攻撃を繰り出す。

骸が三叉の槍を叩き付ければ胴を掴んで拳を放ち、デュークが攻めれば骸が紙一重でその一撃を躲す。

(こいつ、槍使いのくせに速い！)

(これを使うか…嫌、まだ速い…)

腹の底での思惑を抱えたままで二人は戦い続けた。

.....

「私だって…」

.....

「無事か？お前ら」

K・が肩で息をしながら三人に聞くとすぐさま芳しくない答えが返ってきた。

「駄目だ、完全に折れていて右腕が上がらん！」

右肩を押さえたネームレスが言い、続けてゾディアックも

「この状況で無事なはずがあるか！今にも倒れちまいそうだ！」

という、クリザリッドに至ってはやっと上体を起こして

「今やっと意識を取り戻したヤツに聞くか!？」

と逆ギレする始末だ。クソツと舌打ちし、K・が炎を蹴り飛ばすが、イグニスとネームレスは容赦なく光弾で押し切り、K・を弾き飛ばす。

「ぐうあつー！」

「くつツ！余興は終わりだツ！」

K・が吹き飛んだ後ろからゾディアックが火柱を立てて追撃をかける。

しかしそれすらイグニスが光柱を立ててかき消す。クリザリッドに肩を貸しネームレスが二人に駆け寄る。

「大丈夫か？立てるな？」

「ああ…クソツ！あの野郎！」

「言ってる場合か！来るぞ！」

クリザリッドの忠告直後にイグニスが右手を突き出して光弾を放つ。防御しようにもK・は片手を着いていてゾディアックからでは割って入るのに遠すぎる。ネームレスは右肩を骨折しており、

クリザリッドに至っては防御すらままならない。万事休すと思われたその時

「おっきいのー！」

四人の後ろから飛んできた氷の塊が光弾と激突し、轟音と共に相殺した。

振り返って氷の飛んできた方向を見やったK・は氷を飛ばした人間を見て驚愕に目を見開いた。

「クーラー！テメエ、なんで来やがった！」

「私だって戦えるもん！守られてばかりなんてヤだよ！私だってK
に死んでほしくないもん！」

「お前…」

そこにイグニススの哄笑が割って入った。

「フハハハハッ!!良いだろっつ、わざわざ死にに来るとはな！ならば…」

イグニススが右腕を天にかざし、その掌に巨大な光球を生成し、音巢
対琉拳特有の素早い動きで近距離まで近づく。

「ッ！」

「嘘だろ…」

「あんなおっきいの…」

「避けようがない…」

四人が愕然とする中ネームレスのみが對抗策があるような表情を
している。左手の白いグローブを思い切り踏みつけて

「ゾディアック！お前も思いきりデカいのをぶっつけろ！」

「ッ！ああッ！おおおおッ！ハイ・ラグナレク・エンプリオ！」

「絶影！闇に散れえっ！」

ゾディアックが破壊エネルギーの塊とも言つべき魔方陣を飛ばし、
ネームレスは靴で踏んだ白いグローブから渾身の力で左手を抜刀し
た。二つの必殺技：ハイ・ラグナレク・エンプリオと絶影が

イグニススの掌にある光球を直撃し、周囲に爆煙を振りまく。

「そこだ！」

クリザリッドがイグニススの背後に回り、羽交い締めにする。

「何イッ!?クソッ、離せ！」

「誰が離すかよ…」

「ならば死ねエッ…」

背後のクリザリッドを殺そうと右手を後ろに向けたがさすが
クーラがその手を肩口から凍らせ、ネームレスが全力の絶影で斬り飛
ばした。

「K…」

「やれッ！」

「ああ…任せろ…」

ユラリと立ち上がったK、が右手に草薙の炎、左手に嵐属性の死ぬ
気の炎を宿し、掌底突きを構えを取った。

「まっ！待てッ！クソッ！離せッ！」

「またねエよ…！終わりにしようぜ…」

「これが俺の最後の技…そうさな…リーサルプリズン（最後の牢獄）と
でも言おうか？」

K、が大きく踏み込み、その右腕がイグニススの左胸に伸びる。そし
て

「ヒートドライブ!!」

「ガハアッ!!!」

吐血。イグニススの左胸を貫いたK、の右腕が背中から飛び出して
いた。そして左手も頭部を掴んでいる。嵐属性の特徴は分解。その
作用を期待してのことだ。

「キ…サ…マア……」

「灰ものこさねエぜ…分解してやるッ！」

一瞬あとにイグニススの全身が紅蓮の炎に包まれ、塵芥となりはて
た。

「ハア…何とかなったな…ったく、クーラもムチャしやがるぜ。」

「えー？でもK、もピンチだったじゃない！それに、私がいなかった
ら今頃みんな死んじゃってたよ！」

ああ分かった分かったと両手をヒラヒラさせながら苦笑するとK
はぼそりと呟く。

「…ホントやばかったんだよな…」

それからしばらくの間痴話喧嘩を繰り広げていたK、とクーラに
クリザリッドが怒鳴った。

「五月蠅いんだよお前ら！全く…右腕のグローブとれちまったんじや
ないのか!?熱くて死にそうだ。」

それに四苦八苦しながらグローブをはめ直したネームレスと気が
抜けたようにしゃがみ込んだゾディアック、そして両腕を失ってしば
らくさがっていたマキシマが戻ってきて頷いた。

そしてポツリとマキシマが呟く。

「ハア…ホントにアツいねお二人さん…」

K・とクーラはいまだに言い合いをしていたが一応そこは平和そうだった。

……

ドサツと言う音と共に骸の身体が地面に倒れ伏した。

それを見下ろすデュークが満面の笑みを浮かべて快哉を放つ。

「フハハハッ！やった、やったぞッ！フハハハハ…」

しかしその愉悦も長くは続かない。倒れたはずの骸の音が四方八方から聞こえてきたからだ。

「…それはどうでしょうか？」

「何イッ!？」

「…あなたは僕の術中にいたに過ぎませんよ、僕の身体には前世で六つの冥界を全てまわった記憶が刻まれていましてね。」

そこまでいったところで骸がデュークの四方から姿を現す。横目でそれを見ていたアッシュが口笛を吹いた感嘆の声を上げた。

「フューッ。凄いね、分身じゃない、どれも実体だ。」

「…お褒めにあずかり光栄です、アッシュ・クリムゾン。」

「ぬああああっ!!!」

デュークが思いきり拳をブン回して四人の骸を薙ぎ払ったが全て霧のように消える。

代わりに倒れ伏した骸が言葉を紡ぐ。

「クフフフ…あなたの前にいる僕は全て実体を持った幻覚、有幻覚です。さて、本体はどこでしょうか？」

言つが早いかデュークの身体に無数の鴉がまとわりつき、食らいつく。

「何イッ!？」

「限りなく現な幻、命を宿した僕の想像…」

良いながら木の後ろより滲み出るように骸が現れ、その技の名を告げた。

「限現幻獣喰骸鴉（げんじゅうがガイア）」

鴉に食らいつかれても尚もがくデュークに、しかし骸は無造作に決めの台詞を放つ。

「墜ちろ」

鴉が光を放ちデュークもろとも爆発した。跡形もなくなったデュークの魂に手向けるように骸が続きの台詞でシメる。

「そして巡れ。」

その様子を見ていたフランがいつもの調子で呟く。

「わー。グロイです師匠ー。」

しかし他のチームによってクローン達は全滅。気を張る必要のない環境下で骸はフランの呟きなどどこ吹く風。

「さて、フラン、隠蔽を続けなさい。」

「うわー。グロイだけじゃなくてドライですー。」

フランのツッコミが虚しく空に消えた。

.....

かくして非合法組織にモルモットとして扱われていた者達はその因縁を、かたやその元凶を断つことで、かたや改造人間としての生を享受している同類を超えることによって

断ち切った。これから先、彼等はどのように生きていくのか、それは神のみぞ知る…といったところだ。

正義対悪！そして終幕へ

極限流チームの面々がクローン部隊と戦っていた。

リヨウの暫烈拳がクローン京の身体を吹き飛ばし、ロバートが霸王翔吼拳でクローンギースを吹き飛ばす。ユリも二人に負けず劣らずの活躍を見せている。

心なしか他より派手に戦っているわけだが当然のことだ。彼等にひっそり戦うなどという芸当が出来るはずがない。

「極限流奥義！」

残り少ないクローンに向けてリヨウとロバートが期せずして声を揃え、突っ込んでいく。二人の突進が別々のクローンを同時にとらえた。

肩口から思い切りぶつかられてひるんだクローンに向けて二人の拳が次々に襲い掛かる。

「オラオラオラオラオラア！」

「そりゃっ！そりゃっ！そりゃっ！」

リヨウがクローン京をたこ殴りにし、ロバートもクローンギースを滅茶苦茶にシバキ倒す。

「はっ！」

「どないやー！」

仕上げとばかりにリヨウがクローン京の顎をアッパーカットで力チ上げ、ロバートもギースの顎を蹴り上げる。そこから更に派生し、

「どりゃアー！」

リヨウのボディーブローがクローン京を吹き飛ばした。

「幻影脚！」

ロバートが連続蹴りでギースを浮かせ、止めに蹴り上げる。そして最後に二人同時に吹っ飛んだクローンに向けて構え、

「霸王！翔！吼！拳！」

追い打ちに霸王翔吼拳を撃ち込んだ。極限流奥義龍虎乱舞。二人の最大級の奥義だ。

「ちょっぴり…」

「ユリも負けずに向けて来るギースの腹にショートアッパーをぶちかまし、続けて

「アッパーッ！」

アッパーカットを叩き込んでギースの頭骨を叩き割って見せた。芯！ちょうアッパー。何とも恐ろしい技だ。

そこへユラリと滲み出るように現れる影が一つ。

「ほう、まさか貴様が直々に出向いてくるとはな。ジヴァートマ。」

「生憎、幹部が私と雇われの一人しか残っていなくてね。」

「雇われエ？そりゃ初耳やな。そんな即席の幹部なんざ。」

「全く、そっちの傭兵が暴れてくれたお陰だな。困ったものだ…奴も扱い切れんしな。」

リヨウとロバートが怪訝そうな顔で奴？と返すとジヴァートマはまるで物凄い無礼者を見たような顔で応じた。

「ああ、あの男、アデス様の前でポケットに手を突っ込んだままでいるのだ、仮にも雇い主に対して不遜すぎるだろう？おまけに口調も狂っている。強くなければ誰があんな奴を仲間に取り入れるか…」

「ポケットに、手？」

「狂った口調…やて？リヨウ、そいつってもしかして…」

「あのヤクザか…」

.....

リヨウとロバートが同じ男を思い描いた頃、ラルフは転送システムで移動してきたアデスの本拠地で単独行動を取っていた。部隊の方針でいったん散開、各自攪乱しながら最終的な敵本拠地の破壊を目指していた。

「ゴ…ア…」

アデス幹部の一人がラルフの目の前で脳髓を飛散させて倒れた。

「あ…やっちゃまった…こいつは非戦闘員か。参ったな…連行する相手をぶっ殺しちゃったよ…」

ギヤラクティカファントム一発で倒れた幹部を見下ろして気が滅入ったように頭をかくラルフ。その時耳につけていた無線機にクラークの連絡が届いた。

「オウ、どうした？クラーク。こっちは幹部三人撃破したぜ。必殺技一発でおっ死んじまうよ…」

『そんな場合じゃないですよ！今さっきレオナと行動しているウィップから連絡が入りました！』

「何だ？そんな慌てて…」

『レオナが山崎竜二と遭遇、交戦中だそうです！』

「何イツ!?山崎だとオ!?!」

『交戦場所、転送します！俺も向かってますんで!』

「分かった！届き次第最短ルートをつくっていく!」

『了解!』

山崎竜二…それこそリョウとロバートが思い描いた男…恐らくこの世で最も恐ろしい男の名だ。

.....

「まさかあいつを手元に置くとは…」

「正気の沙汰とは思えんなあ」

ともかく…とジヴァートマが殺気をむき出しにした。

「さあ、二人同時にかかって来たまえ。」

「不本意ではあるが…」

「それしか無さそうだな…」

さて、とジヴァートマが芝居がかった仕草で再度口を開く。

「賭ける物はお互いの命。」

それに乗るようにリョウ達も不敵な笑みで返す。

「その存在を賭けて…」

「戦争を始めようやないか!」

ジヴァートマの両手が伸び、それぞれの腕にリョウの虎煌拳とロバートの龍撃拳がぶつかり、周囲に盛大な音を響かせた。

.....

「ケエへへへへッ!!オラオラどうしたア!これで終わりじゃねエよなあ!傭兵のねーちゃん!」

「くっ...出鱈目だけど強い...」

レオナの真空波を生み出す手刀を紙一重で躲し、余裕綽綽で蹴りを放つ山崎に対し、レオナはそれをギリギリの所で防御している。

本法で無秩序な山崎の我流喧嘩殺法だが、それ故にきちんとした戦いを学んだ物にとってこの上無い脅威になる。

「行くぜエー!ヒャアアアアッ!」

奇声と共に飛びかかると山崎はその手にドスを閃かせる。咄嗟にイヤリング爆弾を叩き付け、その手からドスを弾き飛ばしたが右手の勢いは止まらない。

ゴッ!

「ぐあっ」

「良い声で鳴くじゃねエか!もっと鳴けよ!」

右のフックがレオナをとらえ、更に追い打ちといった風な調子で追いかける。

「鳴けつつつてんだろつがオラアッ!」

「く...」

咄嗟に追いかけてくる山崎に吹っ飛びながら十字の真空波を飛ばす。今度は上手くとらえて退けることに成功した。

適度な間合いで体勢を立て直したレオナに山崎が声をかけた。

「やるじゃねエか...おもしれえ、おもしれえぞオッ!」

吼えると山崎がここまで一度も取らなかつた最も危険な行動を取る。

激闘に怯み、割って入ることも出来ずにそれを俯瞰していたウィツプははつきりと見た。

山崎がポケットに突っ込んだままでいた左手をポケットからぬき放ったのだ。まさにそのタイミングで駆けつけたクラークが警告の

引きずりながらのスライディングがリヨウの方にジヴァートマを運ぶ。

「どないやー!」

そして蹴り上げたジヴァートマに向けてリヨウが静かに構える。

「一撃イー!」

ゆっくりと左手を前に出し、肘を直角に曲げ、掌を上に向けて右拳をしつかりと引き絞る。そしてその肉体を吹き飛ばすような大砲、真・天地覇煌拳が放たれる。

「ひっさあっつー!」

それは寸分違わずジヴァートマの胴体を貫き、背中まで突き抜ける衝撃の余波がその身体を二人の中間地点まで吹き飛ばす。しかしそれで二人は終わらない。

「圧殺霸王翔吼拳ッ!」

息ぴったり、同時に放たれた霸王翔吼拳がジヴァートマを跡形もなく吹き飛ばした。

「フウ…!」

「何とかなつたな、リヨウ。ユリちゃんは大丈夫か?」

「全部片付けたけど疲れたよぉ〜。」

三人が一息ついたその瞬間、遠くで爆音が聞こえた。

「オイ…大丈夫なのか…?」

リヨウの冷や汗を伴った問いに答える者はいない。

.....

「大佐!これを。」

「どうしたレオナ!」

山崎を退けた四人がいたのはまさに生化学研究所とも言つべき場所。そこでレオナが示したのは一つだけ隔離されたような培養カプセルが開いている姿。

「オイ…こいつは」

ラルフがカプセルに刻まれた文章を読む。

と。

.....

「燃えるオー！」

京の叫びが自身のクローンを焼いた。

肩を並べて戦っていたツナが異変に気付いたのはそんなときだ。

「ッ！クローンの壁の向こう！そこ！何かいる！」

「ついてもよっ！」

言いながらもつ一体のクローンを焼いた。京だが

「全然減らない……ぜっ！」

と言つとおりクローンの数は全く減らない。

と、クローンの壁に風穴を開けるようにしてバジルのブーメランが

飛来し、なぎ倒すようにして道を造る。

「バジル！」

「行って下さい沢田殿！草薙殿！」

それに追隨するように紅丸が雷皇拳を放つ。

「ああ、行けよ！古里もだ！」

「紅丸さん！」

更に大門、獄寺と山本、了平。果ては白蘭や桔梗、ザクロまでが道を開くように技を放つ。

「分かった、行くぞエンマ！」

「ああ、行こう、ツナ君！京さん！」

しかし京はまだ動かない。と、おもむろに後ろを振り向き、

「いつまで見てる気だ？かかってこないなら手伝えよ！」

と叫ぶ。それに答えるようにして現れたのは八神庵だ。

「フン、俺は手伝いを買って出たつもりはない。だが、俺がアデスとやらを倒したあと、心ゆくまで貴様と戦うのも面白かるう。」

そついつてさっさと庵は走り出す。

「あっ！オイ待て八神！ったく……しよーがねえな、それじゃあ行って

くるぜー」

「ニシム、ヨウジンケイゴ。キケンブンシ、ハイジヨ。」

「ぢゅいーんー」

四人を追いかけようとするクローン京に突然白い衝撃が襲い掛かる。

それは真吾の駆け鳳麟だ。

「じつからさきへはいかせないぜ！」

.....

「無駄に開けてるな……」

「ああ……」

京とツナの眩きが森の中の開けた場所に響いた。と、それに答えるようにして一人の男が現れる。

アッシュそっくりの顔立ちだが所々に差異が見られる。クリーム色の髪には赤と黒、そして金のメッシュが入り、瞳孔も縦に割れている。

「へえ…あなたが親玉かい？まさに日頃の研究成果…って感じだな。」

「貴様らか…我に仇成す愚か者は……」

フン、と鼻を鳴らすのは俺だ。

「愚かだと？俺に戦いを挑む貴様の方がよほど愚かで惨めではないか？」

「身の程を知らぬ人間よ…我はアデス、この星を手始めに宇宙（そら）の全てを統べる我の新たな器……」

そこまでいったアデスは京、ツナ、俺、炎真の順に見回すと厳かに告げた。

「その力、貴様らで試そうか……」

そこへ京が不敵な笑みで割って入る。

「へッ、面白い。どっちみち望む物は同じだ。」

それにツナも続く。

「この星の未来と……」

続けて炎真が

「何より僕らの命―！」

アデスもあざ笑うかのようについ。

「どちらが手にするにふさわしいか…！」

最後に口上を締めくくるように庵が告げた。

「さあ、狩りを始めようか―！」

そして京が吼える。

「行くぜお前ら―！」

「ああっ―！」

「はいっ―！」

「指図をするなッ―！」

襲い掛かる四人に向けてアデスも拳を構え、赤と青と緑が混ざったような黒い炎を両手に宿す。

「来いッ―！」

決戦の火蓋が切って落とされた。

決戦！超カルテットVSアデス 大会の終わり

「喰らえ！」

「どうしたア！」

京と庵が互いにぶつけ合うように闇払いを放った。それらは一直線にアデスに迫る。

「喝！」

しかしそれもただの一声でかき消された。

「超高速！Xカノン！」

「大地の重力！」

ツナが炎の弾丸をに連射し、躲されたそれを炎真が重力でコントロールしてアデスにぶつける。

「ふ。」

しかし効いた様子はない。それから数刻、炎と拳と蹴りが交錯するがアデスにはどれも決定打になり得なかった。

「ありがとう、余興にしては面白かった。」

「ふざけるな！」

庵が放った闇削ぎも全く通じない。そればかりか目にも留まらぬ早業で四人まとめてジャブを食らわされ、吹き飛ばされる次元だ。

「では、無に帰るがいい。」

そういつてアデスが両手を天に掲げた。それを見た京と庵が息を呑む。

「マジかよ！」

「混……」

二人の驚愕の声が終わった瞬間、全身から黒い炎が迸り、四人に大ダメージを与えた。

「フン、我にかかれば所詮人間などこんな……んん？」

愉悦に満ちた言葉はしかし吹き飛んだ四人が立ち上がったことにかき消えた。

「バラバラに突っ込んで勝てねえぜ……古里！」

京が炎真の名を呼ぶ。炎真もそれに答えて大地の重力を最大パワーではなつた。

「ぬっっ…身動きが取れん…」

そこにも目にも留まらぬ速さで滑り込んだのは庵。

「遊びは終わりだ！」

庵の十八番、八稚女だ。

「悔いて！詫びろ！」

そして胸倉を掴み、「貴様の命でな！」の一声で爆発を起こして吹き飛ばす。

「フ、これで終わり…」

「馬鹿めっ！」

裏参百拾六式、豹華。ズドツという音と共に空気ごとアデスの身体に裂傷が出来る。打ち下ろすように一撃、続けて打ち上げるようにもう一撃。

「ハアアアッハッハッハ！」

そしてたがの外れた高笑いと共に閻削ぎと同じく火柱をつかって突き上げる。

「大地の重力！」

そこで再び炎真が大地の重力を使い、アデスに次の庵の攻撃を躲せないようにする。

「楽には死ねんぞ！」

八酒杯。封ずる者の使命を体現した敵の動きと力を一時的に封じる八神流の奥義だ。

「さて…と…いろいろあつたが…ツナ。」

「ああ、これで終わりだな。」

アデスを挟むようにして立つ二人の右手には自身の全ての力を振り絞った炎。

「終わらせよう…」

「今回だけだ、草薙流の奥義など。悶え苦しめ」

庵と炎真の右手にも同じく最大出力の炎が宿っている。

「まっ！まてっ！やめ…」

しかし四人の腕は止まらない。

「喰らいやがれイイイイッ！」

「これで終わりだ！」

「裏巻百八式！大蛇薙！」

「そして狂い散れ！」

四人の大蛇薙に焼かれたアデスは叫び声一つあげることなく灰となった。

「さて…最後に八神と戦うのがお約束なワケだが…ツナ、マスコミをあの特設会場に集める。お前ももちろん来い。」

「えっ？」

突然京が言い出したことに当然俺が食ってかかる。しかし言った本人は涼しい顔で

「これで邪魔者はいなくなったんだ。決勝戦、やろっぜ？」

とツナに声をかけた。

「は…はい！」

「ツナ君…戦いつて嫌いなんじゃ…」

「格闘技より今はねっちよりの方がいいやだよ…」

ツナの悲痛な呟きに炎真は苦笑するしかない…

……

「クソ…まだ…終わってなどいない…」

憎々しげに呟くのは年老いたジヴァートマとも言つべき男…本来の身体へギリギリで戻ることが出来たアデスだ。

「新しく、より良い器さえ出来れば…永遠に終わることはない…そうだ…世界を統べるのはこのわたし…」

そこまで言ったところでアデスは自分の胸から突き出た鋭利な金属片に気付いた。自分の胸が刃物によって貫かれたことを自覚したアデスの耳にある男の声流れ込む。

「約束通り報酬はいただいたぜ… 円と…アンタの命だ。ケへへへへ、毎度あり。」

「貴様…山崎…ガハアツ！」

そこまで言ったところで事切れたアデスを一瞥するとドスを引き抜いた山崎はラルフに思いきり殴られた右頬をさすった。

そして彼が去ったあとには無様に倒れ伏すアデスの骸と響き渡る山崎の哄笑だけが残っていた…

.....

「ベテイ、注文しないの？」

「美味しそうなものはあるけど…中国語が…ね…」

「私も中国語が読めないのだが…デュオロン、すまないがこれを注文してもらえるか？」

「ああ、分かった。」

「ガツガツガツ…オイアツシュ、くわねえんなら俺が貰っちゃまつぞ？」

「ああっ！ダメダメダメ！」

シェン達の約束。遥けし彼の地よりいずる者達との戦いが終わったらアツシュの奢りで蟹を食べに行こうという約束の通りにシェンのお気に入りの店で彼等はテーブルを囲んでいた。

「ごく普通の味は良いが規模の小さい店。テレビからは天気予報が流れている。」

と、唐突にアツシュが店の奥に向かって声を張った。

「すいませーん！テレビのチャンネル、変えても良いですかー？」

店の奥から店長の好きにしろという声と共にリモコンが放られる。

「アツシュ、何を見るの？」

「それはね…」

「決勝戦…だろっ？」

隣に座るエリザベートの問いに答えたのはアツシュではなくアーデルハイド。

「うん、やっぱり分かる？」

「もちろん、気にならないはずがない。私もそうだが…」

三人が会話しているうちにアツシュの手からリモコンが、皿から蟹

の足が消えた。

「…へ？」

ふと見ると会話に参加していなかった二人がそれぞれリモコンと蟹の足を持っていた。

「もう大将戦だぞ、見なくて良いのか？」

と、リモコンを掠め取ったデュオロンが言い、シエンがいつの間にもやらアツシユの皿から強奪した蟹を食べている。

「あっ！」ら、シエン！ああもつ、店長！これとこれ、追加で！」

そんなドタバタを見て微笑むエリザベートがテレビのブラウン管に目をやるとそこには黒のシングルライダーズジャケットの青年とパーカーの少年が戦っていた。

.....

「あああああああああああああああああ！」

「おおおおおおおおおおおおおおお！」

ツナと京の全力の拳が交差する。

ここはマンハッタンの特設ステージ。アデスによって中止になった決勝戦が行われていた。

クロスカウンター。互いの攻撃が交差し、互いに大きく吹き飛ばされる。

「っクウーッ！ってえー。」

よろめきながら京が立ち上がるがツナの方はダウンしたままだ。勝敗を分けたのはリーチ。より腕の長い京の方がより深く重くダメージを与えられたのだ。

『決まったアーツ!! K O F R 優勝は草薙京率いる日本チームだアーツ』

ENDING 戻った平和、そして…

吹田にある児童公園の前でユキが京に訊いた。

「ねえ、京、最近よそよそしくくない？」

「ユキのそんな問いに京は別に…と歯切れの悪い調子で返す。

一体どうしたんだろう…と、ユキが訝しむユキの目に京の左手薬指の指輪が入る。

「え…!?京、それって…」

「あっ…これは…その…ああ、もう！ホラッ！」

そういつて京が突き出したのはリングケース。中には片方しかないペアリングが入っていた。

「京…?これ…」

「よそよそしいんじゃないかっていつ渡そうか迷ってたんだよ！」

真っ赤になって返す京。そこに生体草薙京リーダー…もとい八神庵が現れた。

「京…」の間の続きだ。」

「テメエ、デリカシーってもんが欠如してんじゃないかねエか?このロマンチックな場面で出てくるんじゃないやねエよ。」

「フン、俺に必要なのは貴様が泣き叫ぶその姿だけだ。」

「それにな、公園ってのは未来ある子供達がお友達と仲良く遊ぶ場所だけ?テメエなんかと泥んこ遊びなんざ真っ平ご免だぜ。」

「ならばここで貴様の命を絶ってやるのも面白がるっ。」

「下がってな、ユキ。」

そしてユキは戦いを始めた京を追いかけるように呟く。

「照れなくたって良いのに…ねえ?」

その頬を伝う喜びの涙。それは平和が戻った象徴とも言えるだろう。

そんな三人の頭上には角のない真円を描く月が昇っていた。

.....

並盛高校の購買部に銀髪の少年の怒号が響き渡った。

獄寺が怒号を叩き付けた相手は栗色の髪の少女だ。

「それは俺が目えつけてたカレーパンだ！最後の一個なんだから横取りすんじゃねー！」

「ベエーっだ！早い者勝ちでしょー！」

財布を片手に怒鳴る獄寺と台頭に口喧嘩をしている少女の両手首に金色の腕輪が光る。

少女の名は大亜氷華（だいあひょうか）。かつてクーラ・ダイヤモンドと名乗っていた人間だ。

彼女とK・はそれぞれボンゴレの協力で名前を変えて一般社会に暮らしている。ちなみにK・と同居している、住所はツナの家のだ。

腕輪はボンゴレの天才メカニックスパナが制御用グローブの代わりに制作したもので、これも目立たず溶け込むための一助になっている。

ギアアギアと騒ぐ二人とその間であたふたするツナ。

それもまた一つの平和である。

.....

その夜、ツナの家の隣に越してきたK・は隣で自分たちの歓迎会をしてくれているのだがそれには行かずに自宅のベランダで月を見ていた。

そしておもむろにポケットから赤い制御用グローブとサングラスを取り出す。K・をK・たらしめていたそれをしばらく感慨深げに見つめたあとでまた視線を空に戻す。

「あばよ。K・。」

そういつて青年は二つを放り、赤い腕輪で完璧に制御された力を使って炎を蹴り飛ばし、グローブとサングラスを灰にした。

「翔ー！みんな待ってるよー！早くー！」

隣から恋人の呼ぶ声がしたのでかつてK・と名乗っていた青年
九条翔は今行く！といって隣にある沢田家へと走っていった。

・・・

KOFも全ての行程が終わり、それぞれが新たな未来へ向けて歩み
を進めていく。

極限流道場はぐんぐん発展していったがあいかわらずタクマとユ
リのハチャメチャな練習に門下生は逃げ出しては戻って来てを繰り返
返しリヨウの心労を増やしている。

テリーとロックはあいかわらず世界を放浪しており、アンディや
ジヨーを辟易させている。

黒曜に戻った骸はかつて自らの分身であった女性、クローム髑髏と
結ばれ、千種や犬、フランと共に暮らしている。

ラルフ達もハイデルンの元で日夜世界中を飛び回り、各地の戦場で
活躍している。

真吾はかつて自分の追っかけだった京子と結ばれた。今でも二階
堂グループ会長となった紅丸や柔道界からも引退した大門、師匠の京
とのつきあいは途切れていない。

庵はあいかわらず草薙京探知機を内蔵しているかのごとくピンポ
イントで京を狙って現れた。ネームレス達Kシリーズの生き残りは
世界中に散らばり、平穏だったり波瀾万丈だったりの人生を送ってい
る。

バジルは引退した家光から門外顧問の地位を引き継ぎ、活動を続け
ている。その傍には香澄がぴったりと付き添っているらしい。

雲雀は並盛の秩序を守るべくあいかわらず町長を超えた権力で街
に君臨している。

シモンファミリーはボンゴレの兄弟ファミリーとして歴史の一線
で活躍し、ボンゴレと共に弱者にとっての希望の象徴となった。

アテナと拳崇は結ばれ、二人の子供に恵まれた。

アッシュはエリザベートと一人息子の三人で穏やかに暮らしてい

る。また、シエンとの繋がりは消えておらず、今でもときどき中国に遊びに行っている。デュオロンは父、飛賊の裏切り者の龍と戦い、自らの命と引き替えに仲間の復讐を果たした。彼の遺体は仲間の麟と妹の笑龍、そしてアッシュ達によって手厚く葬られた。

アルバはサウスタウンに戻り、堅実な施政で街をもり立てていった。並盛にパオパオカフェ4号店を建てると言って日本に渡ったソワレも元気にやっている。

月日は矢のように流れ、そして二十年後 日本のある場所で巨大な門に隙間が空き、そこから三人の人間が這い出した。

「刹那…すぐに門が閉じてしまっぞ…」

「気にするな…また開けばいい。行くぞ、ルガール、イエーガー。俺達によって地獄門は…」

刹那と呼ばれた男が残りの二人 ルガール・バーンシュタインとイエーガーに振り向いて高らかに叫ぶ。

「常世の扉は開かれる！」

それは新たな戦いの序章となり、次なる世代を戦いの渦へと巻き込んでいく…

t o b e c o n t i n u e d …